

敷島町文化財調査報告 第18集
(山梨県)

松ノ尾遺跡Ⅲ

マンション建設事業に伴う
縄文時代・古墳時代・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

敷島町文化財調査報告 第18集
(山梨県)

松ノ尾遺跡Ⅲ

マンション建設事業に伴う
縄文時代・古墳時代・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会



1. 松ノ尾遺跡第Ⅲ次調査区出土の緑釉陶器



2. 松ノ尾遺跡第Ⅲ次調査区出土の中国貿易陶磁器（白磁・青白磁・青磁）

序 文

敷島町では、近年民間の開発行為に伴う埋蔵文化財の発掘調査が急増しています。今回の調査もその例外ではなく、マンション建設に先立つ「松ノ尾遺跡」の発掘調査の成果をまとめたものです。

この遺跡は、今からおよそ1,300年前の古墳時代後期と、約1,000年前の平安時代にあたる大きな集落跡であることがこれまでの調査で明らかとなってきています。

とくに、1994年に行われた第1次調査では大量の土器、石器、鉄製品などのほか、平安時代終わり頃の金銅製小仏像が2躯出土し、一躍脚光を浴びることとなり、町内をはじめ県内においても大変重要な遺跡であると認識されるようになりました。

今回の第3次調査でも、縄文時代、古墳時代、平安時代の各時代において当時敷島町内で暮らしていた人々の住居跡（イエ）が発見され、より一層内容の濃い遺跡であることが窺えます。

このように、私たちの暮らしている町には先人の残した多くの貴重な足跡を辿ることができ、町の財産でもある文化財を今後もなお一層調査・記録を精密に行って永久に保存し後世の人々に語り伝え、また教育普及に役立てていく必要性を感じざるを得ません。

最後に、開発者長田 裕氏の文化財保護に対する深いご理解の下、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力いただきました関係各位に心より厚く御礼申し上げます。

平成16年4月

敷島町教育委員会

教育長 山口正智

例 言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町大下条地区に所在する松ノ尾遺跡の発掘報告書である。
2. 本調査は、マンション建設に伴って実施した発掘調査で、調査面積は約 250 m²である。発掘調査から報告書刊行までの経費は、開発者である長田 毅氏が負担した。
3. 発掘調査は、平成 10 年（1998 年）3 月 13 日～5 月 11 日までの約 2 ヶ月間にわたって行った。その後、整理作業は、断続的に行なった。
4. 発掘調査および整理作業にあたった組織は、次のとおりである。

調査指導・主管	敷島町教育委員会
調査主体者	敷島町文化財調査会
調査事務局	敷島町文化財調査会
調査指導担当者	《発掘調査・整理調査》 大島正之（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係副主査）
	《 整理調査 》 小坂隆司（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係嘱託）
5. 本書の遺物実測・トレース作業については、大島、小坂の指示のもと、青山制子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、小林明美、関本芳子、高添美智子、望月典子が担当した。遺跡全景および遺構は大島が撮影し、遺物写真の撮影および図版編集は小坂が行った。本書の執筆、編集は小坂が担当し、最終的な全体校正を大島が行った。
6. 調査ならびに報告書作成にあたり、次の方々より御教示をいただいた。ここにご芳名を記し、感謝申し上げる。

小野正敏（国立歴史民俗博物館）、斎藤孝正（文化庁美術工芸課）、百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）
藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、羽中田壯雄（敷島町文化財審議会）、山下孝司、閔間俊明（姫崎市教育委員会）、村松佳幸（長坂町教育委員会）、佐野 隆（明野村教育委員会）
7. 発掘調査ならびに整理作業参加者
青山制子、浅川松子、飯室久美恵、石川弘美、一瀬一浩、長田由美子、尾沢玉枝、小林明美、三枝延子、末松福江、関本芳子、高添美智子、近浦正治、保坂広昭、保坂 勇、望月典子
8. 本遺跡の出土遺物および調査で得られたすべての記録については一括して敷島町教育委員会に保管している。

凡 例

1. 本書の第 1 図は国土地理院発行の地形図（1:25,000）「甲府市北部」「姫崎」「甲府」「小笠原」の各一部分を用いて作成したものである。
2. 遺物挿図中、断面が白抜きは土器・土師器・土師質土器で、■は須恵器、▨は陶器類、□は磁器である。また、土師器器面が■は黒色処理された面を表記する。
3. 図版中、遺構と遺物は縮尺が統一されていない。

本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 遺跡をとりまく環境	
1. 遺跡の立地と環境	1
2. 周辺遺跡と歴史的背景	1
第2章 遺構と遺物	
1. 縄文時代	6
a. 7号住居跡	
2. 古墳時代	9
a. 1号住居跡	
b. 3号住居跡	
3. 平安時代	12
a. 2号住居跡	
b. 4号住居跡	
c. 5号住居跡	
d. 6号住居跡	
4. 時期不明	19
a. 上坑	
b. 溝状遺構	
第3章 遺構外出土遺物	21
まとめ	27

挿図目次

第 1 図	松ノ尾遺跡と周辺の遺跡	2
第 2 図	調査区位置図	5
第 3 図	遺構配置図	5
第 4 図	7号住居跡	6
第 5 図	7号住居跡出土遺物(1)	7
第 6 図	7号住居跡出土遺物(2)	8
第 7 図	1号住居跡	9
第 8 図	1号住居跡出土遺物	10
第 9 図	3号住居跡と山上遺物	11
第10図	2・4号住居跡	12
第11図	2号住居跡出土遺物	13
第12図	4号住居跡出土遺物	13
第13図	5号住居跡と出土遺物(1)	14
第14図	5号住居跡出土遺物(2)	15
第15図	6号住居跡と出土遺物	16
第16図	1・2号土坑と1~3号溝状遺構	20
第17図	遺構外出土遺物(1) 縄文	21
第18図	遺構外出土遺物(2) 古墳時代	22
第19図	遺構外出土遺物(3) 平安時代(1)	23
第20図	遺構外出土遺物(3) 平安時代(2)	24
第21図	遺構外出土遺物(5) 陶器・中世・石器	25

表目次

第 1 表	住居跡出土遺物観察表(1)	17
第 2 表	住居跡出土遺物観察表(2)	18
第 3 表	住居跡出土遺物観察表(3)	19
第 4 表	土坑一覧	19
第 5 表	溝状遺構一覧	19
第 6 表	遺構外出土遺物観察表(1)	26
第 7 表	遺構外出土遺物観察表(2)	27

図版目次

図版1-1	遺跡全景
図版1-2	発掘風景1
図版1-3	発掘風景2
図版2-1	7号住居跡
図版2-2	遺物出土状態1
図版2-3	遺物出土状態2
図版2-4	7号住居跡出土遺物
図版3-1	1号住居跡
図版3-2	1号住居跡カマド
図版3-3	1号住居跡出土遺物
図版4-1	3号住居跡
図版4-2	3号住居跡出土遺物
図版5-1	2・4号住居跡
図版5-2	2号住居跡出土遺物
図版5-3	4号住居跡出土遺物
図版6-1	5号住居跡
図版6-2	5号住居跡出土遺物
図版7-1	6号住居跡
図版7-2	6号住居跡カマド
図版7-3	6号住居跡出土遺物
図版7-4	1号土坑
図版7-5	2号土坑
図版8-1	2号溝状遺構
図版8-2	3号溝状遺構
図版8-3	遺構外出土遺物(1)
図版9	遺構外出土遺物(2)

第1章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境（第1図）

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源とし南流する荒川によって開拓された北から南へと緩やかに傾斜した扇状地形を成している。この西側には、北西部にそびえる茅ヶ岳の裾部を形成するながらかな赤坂台地が貢川と釜無川に挟まれるように南北に張り出して伸びており、JR中央線付近において終息する。一方、北側はこの扇状地形の背後を担うように東西に大きく片山が跨り、さらに東側には千代田湖を挟んで尾根筋を南側へと進むと舌状に張り出した湯村山がある。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、盆地に向かって南向きに開口し、まるで天然の要塞を形成するような特殊な地形を織り成している。

このうち荒川の右岸に位置する敷島町は、町域は南北約17 km、東西約4 kmと南北に細長い町である。本町は大きく北部の山間地帯と南部の盆地部におよそ大別されるが、町域のほぼ8~9割は標高1,704 mを測る茅ヶ岳をはじめとする曲岳、太刀岡山などの山岳地帯や一部の丘陵からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形で、東はちょうど荒川右岸に面し、西は貢川を境として東西を河川で挟まれた南北に細長い格好を呈し、盆地北西部の一部に相当する。

以上のように、甲府盆地北西部は中央に荒川が南流し、東西北部の三方を台地と丘陵により囲まれた空間が形成され、荒川右岸の本町ではこのような地形をもとに様々な歴史的背景が垣間みられる。

2. 周辺遺跡と歴史的背景（第1図）

近年もっとも頻繁に発掘調査をおこなっている町南部の遺跡について時代ごとに概観していくこととする。代表的な遺跡は9遺跡が上げられる。

縄文時代 町内では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されておらず、人々が生活していた最も古い痕跡は縄文時代からである。これまで11軒の住居跡が発見されている。

代表的な遺跡には、松ノ尾遺跡①、原腰遺跡②、金の尾遺跡⑧などが上げられる。

原腰遺跡はこの時期に稀な埋甕炉を有する縄文時代前期末の住居跡が1軒発見されている。

金の尾遺跡では、これまで6回の調査がおこなわれてきたが、1987年の中央高速自動車道建設における第I次調査で弥生時代の集落跡とともに縄文時代の住居跡8軒（前期末1軒、中期7軒）が調査された。

現在のところ、もっとも濃密に該期の遺構・遺物が確認できるのは今のところ金の尾遺跡である。

弥生時代 金の尾遺跡があり、県内外を代表する大変重要な遺跡である。第I次調査で弥生時代の住居跡32軒、方形・円形周溝墓17基をはじめ、集落跡を二分するとみられるV字の溝などが発見されており、県内でも最も古い方形周溝墓群を有する弥生時代後期の集落遺跡として著名である。遺物をみると、中部高地系の土器と東海系統のものがともに出土していることから学術的にも貴重な資料を提供している。

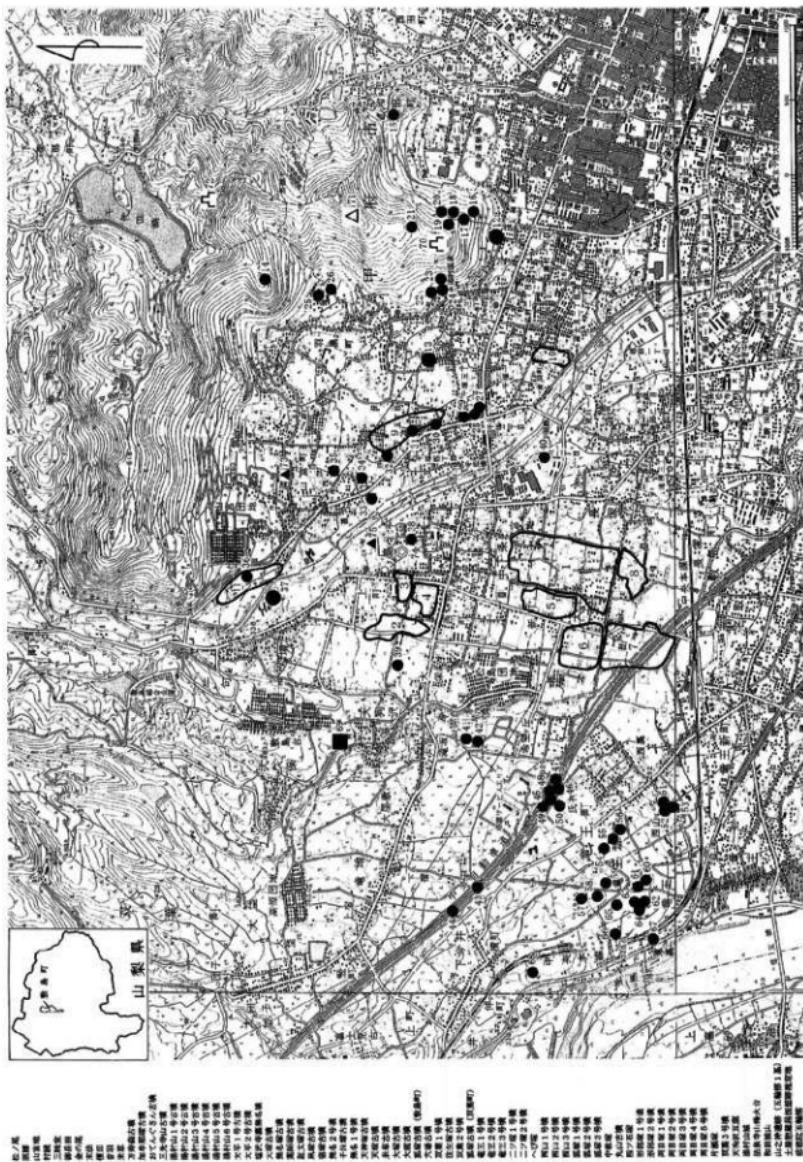
近年の第IV次調査で、I次調査で発見されたV字溝の延長を確認。発見された方形周溝墓には弥生時代後期のものをはじめとし、古墳時代前期、そして壺型埴輪を伴う古墳時代中期に該当する低墳丘墓も新たに確認された。1996年の第VI次調査では集落を外周する長さ約55mにおよぶ大溝（環濠跡）が出ている。

古墳時代 これまで6遺跡においてその存在が確認されている。

前期の遺跡は、松ノ尾遺跡①、原腰遺跡②、三昧堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、未法遺跡⑨などが上げられ、各遺跡ともS字状の台付甕、壺、高坏などが多く出土している。

御岳田遺跡（I次）では調査区内の落ち込みから水晶の原石8点と水晶製丸玉の未製品1点が、末法遺跡（II次）では1号住居跡から凝灰岩質の石材で加工途中とみられる管玉1点と剥片類が出土し、周辺に該期の工房跡の存在が予測される。

第1図 松ノ尾遺跡と周辺の遺跡



金の尾遺跡（第IV・VI次調査）でも多くの遺物が出土しており、とくにIV次調査では本町で初めてとなる該期の周溝墓が2基確認されたことから、さらに周辺で新たな集落跡も今後発見される可能性が実に高い。

中期の遺跡は、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でそれぞれ住居跡1軒がある。

末法遺跡（I次）では1号住居跡から甕、壺、高杯、壺などが出土し、しかも器種と量も充実している。金の尾遺跡（IV次）1号住居跡や御岳田遺跡（I次）2号住居跡からも甕、瓶、壺、高杯などがみられる。

その他、遺構は確認されていないが松ノ尾遺跡の第II次調査で該期の大型の有段高杯壺部2個体（口径約25cm、深さ約5.0cm）が出土していることから、周辺には該期の遺構・遺物が点在するようである。

なお、金の尾IV次調査の周溝墓群には二重口縁をもつ「壺形埴輪」を出土したものが1基存在する。

後期の甲府盆地北西部は、6世紀中頃から横穴式石室を有する後期古墳が築造されるようになる。

荒川左岸の甲府市湯村に位置する万寿森古墳4や県内で2番目の石室規模を誇る加牟那塚古墳5の存在などからこの頃本地域は県内でもかなり大きな勢力拠点となっていたことが窺える。

さらに、6世紀末～7世紀前半には町の南部を群集墳（千塚・山宮古墳群—甲府市、赤坂台古墳群—双葉・童王など）が取り巻くようになる（第1図●印）。

敷島町内にも戦後間もない頃にはまだ4・5基の古墳が確認できたようであるが、現在では荒川右岸沿いに北から大塚古墳29と大庭古墳30が存在するのみとなっている。

また、松ノ尾遺跡の第I・II次調査ではおそらく荒川の氾濫によるとみられる大規模な流路跡が確認されており、これによって運ばれた土砂に相当すると考えられる包含層中から須恵器の甕、金環、勾玉、ガラス玉、切子玉、白玉、銅鏡、鐵鎌、鐵製刀子など古墳の副葬品とも思われるようなものが出土している。

当時の人々が暮らしていた集落跡は、本町内では現在のところ松ノ尾遺跡において非常に高い割合で発見されており、他では金の尾遺跡の第II次調査で住居跡1軒が遺跡の北東端で唯一確認されているだけである。

松ノ尾遺跡は各次調査でこの時期の住居跡が常に発見されているが、周辺遺跡と比べても遺構・遺物が最も集中していることが窺える。第I、II、V次調査では住居跡が複雑に重複してみつかっており、とくに第II次調査では一辺約7m、第V次調査で一辺約8.5mと約8.0×6.0m、第VII次調査でも一辺約7.7mにもおよぶ大型の住居跡が発見されている。一方、荒川左岸の甲府市千塚に位置する榎田遺跡1でも古墳時代後期の住居跡が12軒発見され、規模が一辺約7m四方を測る大型のものもみられる。集落内におけるこのような大型住居跡の存在について今後その位置付けを考慮していく必要性がある。

盆地北西部でのこうした勢力の繁栄を背景とし、古墳時代の終わり頃には通称敷島台地の南西に天狗沢瓦窯61が操業を開始するようになる。これは県内最古の瓦窯で、7世紀後半（白鳳期）とみられている。

この時期に併行する集落跡については、松ノ尾遺跡で近年徐々に住居跡が確認されてきており、また近隣では甲府市の榎田遺跡や音羽遺跡2で古墳時代後期～奈良時代に相当する住居跡が発見されている。

しかし、天狗沢瓦窯跡で焼かれ、その瓦が供給された寺院跡は残念ながらまだ発見されていないが、近年の調査で松ノ尾遺跡と村続遺跡④において瓦片が出土してきており、今後更なる調査が期待される。

奈良・平安時代 該期の遺構は町内で現在もっとも数が多く、住居跡軒数だけでも総計100軒以上ある。

これまでの調査成果では、奈良時代から平安時代初め頃にかけては発見される遺構も未だ少ないが、平安時代中頃～末頃にかけては急激に遺構数も増加し該期の集落跡が主体を占めている傾向にある。

松ノ尾遺跡①は7回の調査でこれまでに住居跡37軒と竪穴状遺構10基が確認され、周辺の三昧堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でもその広がりと分布がみられる。

一方、町南部の北側では、原腰遺跡②、山宮地遺跡③などが上げられるほか村続遺跡④では調査面積は狭小であったが計36軒が確認され、詳細は今後の調査によるが大きな集落跡の様相を呈する。

この村続遺跡の南側には現在甲府から双葉へと横断する通称「山の手通り」が走っており、これは甲斐古道9筋の内の1つにあたる道筋で旧「總坂道」に相当する。本来茅ヶ岳の麓を経由して甲府の塙部から長野県佐久の川上までを結ぶ甲斐と信州を繋ぐ古道であった。

各遺跡出土の遺物をみると、膨大な量の土器をはじめとし須恵器、灰釉陶器、陶磁器類、また鍛冶関連遺物や鉄・銅製品なども出土している。中でも松ノ尾遺跡では墨書き土器や円面鏡(4個体分の破片)、そして銅製の帶金具や金銀型小仏像2軸が、また村続遺跡では銅製小仏像の台座が1軸出土していることなどが特筆される。銅製小仏像はその出土状態や共伴遺物、文様・鋳造方法などからおおよそ11~12世紀の所産とみられ、しかも現在県内の発掘調査で出土した4例のうち3例が本町で発見されたものとなっている。

一方、平安時代末頃になってくると青磁や白磁などの貿易陶磁器が出土する遺跡がみられるようになる。

中世　該期の明確な遺構が確認されているのは、松ノ尾遺跡①と山宮地遺跡③の2遺跡である。

松ノ尾遺跡は、第VI次調査において一辺約5.2m、最深部約40cmを測り、竪穴内に人為的に石が敷き並べられた竪穴状石組遺構が1基発見され、周辺からは土師質土器や青磁片などが出土し、おそらく平安末～中世初頭の遺構とみられる。また、この石組遺構の周辺にはピット群が展開し、この内近接したピットから仏像の頭部にみられる螺旋1点が出土しており、今後これらの遺構・遺物から遺跡の性格を十分に検討していく必要性がある。

山宮地遺跡では、近年15・16世紀代とみられる遺構や遺物が調査成果として上がっている。

第I次調査ではカワラケや古錢などが出土した竪穴状遺構1基や土坑などがあり、さらに第II次調査において竪穴状遺構4基、土坑14基が発見されている。とくに後者の2号竪穴状遺構からは全国でも初例とみられる数点の銅製仏具がまとまって出土した。

山宮地遺跡の東脇には前述の穂坂道と南北に直行して南北朝時代に「御嶽道」が発達するが、この古道は修驗道の靈場であった金峰山信仰の登山口であったようである。この「御嶽道」と遺跡との位置関係、そして銅製品の内容から「御岳信仰」とのかかわりが推測される。

さらに、第III次調査ではカワラケと古錢が埋納された計32基にのぼる土壙墓群が検出され、本遺跡は極めて部分的な調査であるにもかかわらず中世遺構が広範囲に埋蔵されていることが明らかとなってきた。本遺跡の東脇には御嶽道を挟んで調査の手がこれまで一切入ったことのない大庭遺跡があり「甲斐国志」古蹟部には宇大庭に武田家の家臣であった「土屋惣昌昌」屋敷跡66が存在したという記述がみられ、山宮地、大庭遺跡周辺のこの一帯は本町における該期の様相を考えいく上でも今後重要な地域であるといえよう。

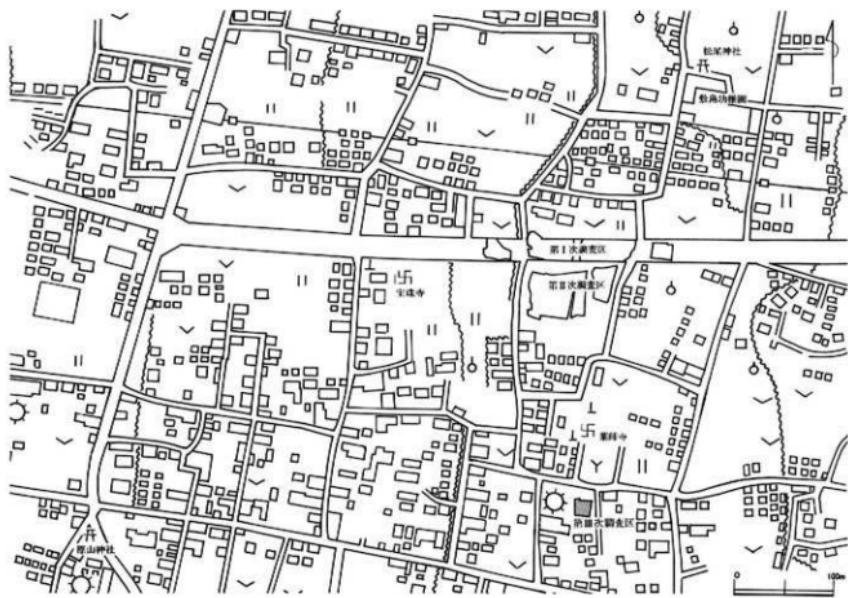
このように、近年の発掘調査ではこれまで判然としなかった中世の様相も徐々に明らかになりつつある。

明確な遺構はまだ判然としないが、これまで調査を行ってきた各遺跡では量的には僅少であるがカワラケや常滑・瀬戸・美濃などの陶器類、そして白磁、青磁などの貿易陶磁器などの出土が目立ってきており、今後盆地北西部地域における中世の様相を把握していくうえで注目される。

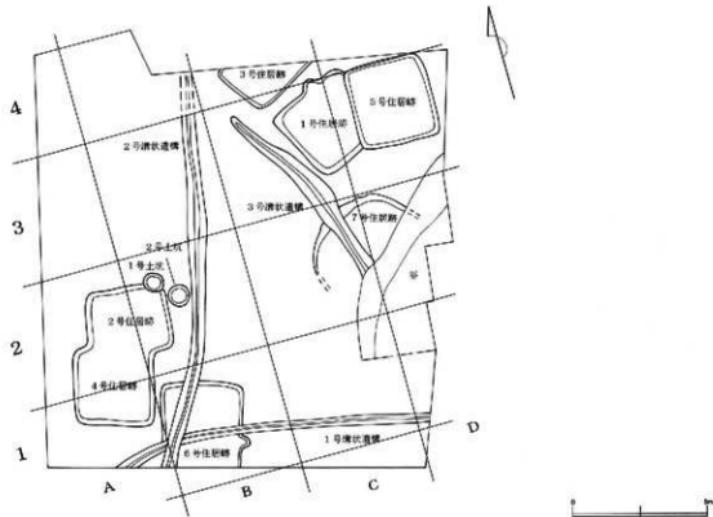
ほんの10年ほど前までは敷島町が所在する甲府盆地の北西部地域は調査の手がほとんど及ぶことがなかつたことから、歴史の上では空白地帯ともなっていた。

しかし、以上にみてきたように町ではいまだに大規模な調査が数少ない状況であるにもかかわらず、内容の濃い成果が近年徐々に蓄積され始めてきている。

以下では、平成10年度におこなわれた松ノ尾遺跡第III次調査の成果について時期ごとに報告していく。



第2図 調査区位置図



第3図 造構配置図

第2章 遺構と遺物

松ノ尾遺跡は平成13年度までに7ヶ所の調査がおこなわれてきている。ここに報告するⅢ次調査は、本遺跡包蔵地の南東端に位置し、ちょうど2軒の仏像を出土した第1次調査地点から直線距離で真南へ約200m離れた場所でおこなわれた。

調査の結果、縄文時代住居跡1軒、古墳時代住居跡2軒、平安時代住居跡4軒、土坑2基、溝状遺構3条など調査面積が狭小であったにもかかわらず多くの遺構・遺物が出土している。

1. 縄文時代

現在最も開発が進んでいる敷島町の南部では、この時代の遺構は金の尾遺跡に偏在して多く発見されており、この松ノ尾遺跡でははじめての発見となった。

a. 7号住居跡（第4～6図、図版2）

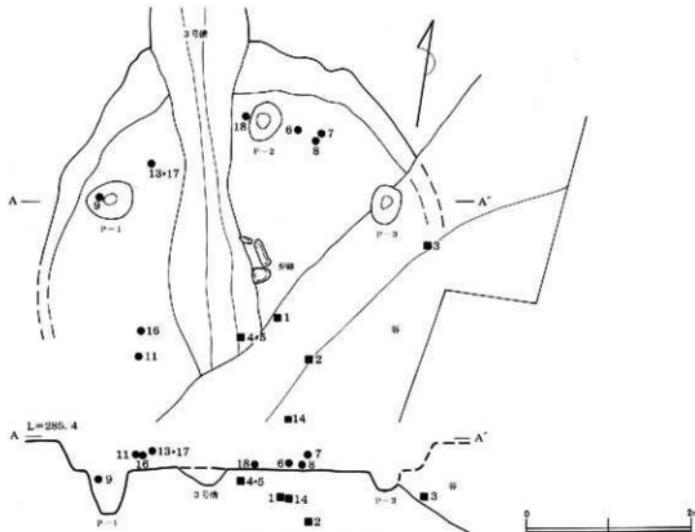
調査区東側C-2・D-2グリッドにまたがって発見された。住居跡中央は3号溝状遺構によって切られ、南東部は自然の谷状地形が入り込んでおり、遺構の南東半部は不明瞭である。

住居跡の規模は直径約5.0mの円形を呈するともみられ、北西部で深さ約30cmを測り壁は緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ水平で、とくに踏み固められたような硬い面は認められない。

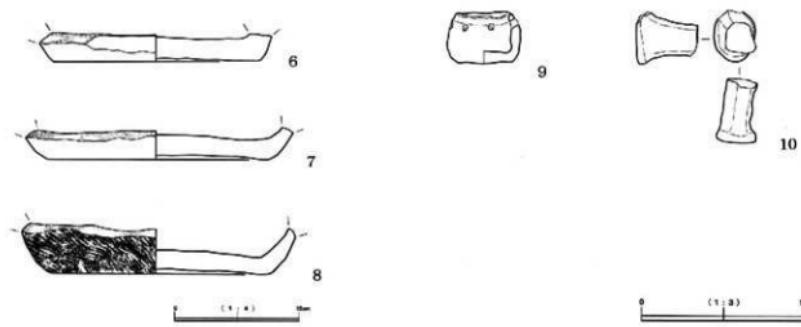
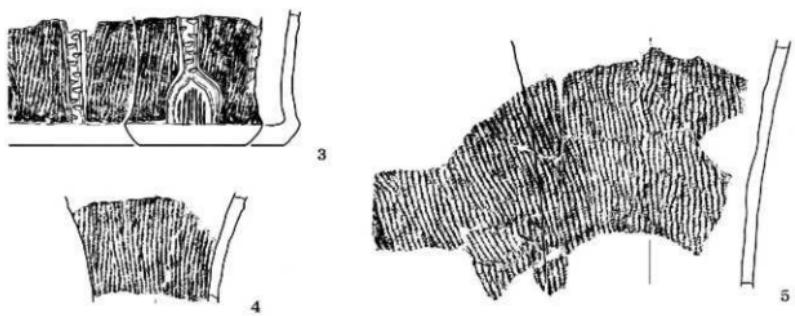
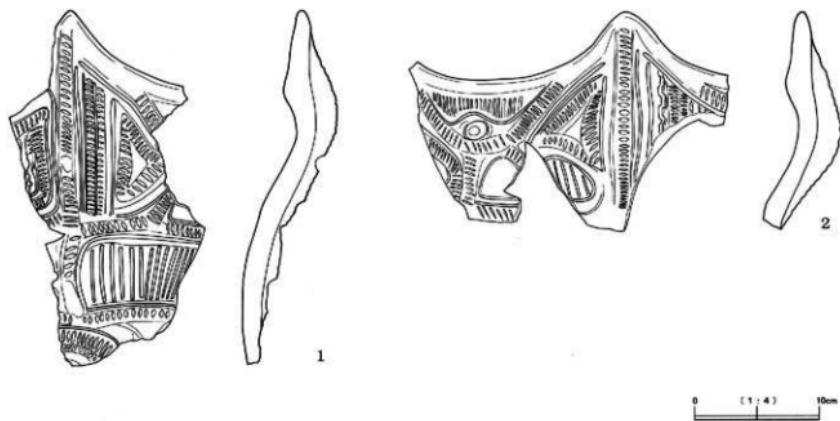
炉は、住居跡の規模と形状から床面のほぼ中央に位置していたと考えられるが、3号溝状遺構によって西側半分を擾乱されている。おそらく約35cm大の扁平な石を四角に組んでいたのである。炉内には若干の焼土が含まれていたが、火床面等は確認できなかった。

柱穴は、北側の壁際に沿って3ヶ所（P-1～3）あり、直径約35～55cmを測る。P-1は深さ約50cmと最も深く、P-3は深さ約20cmである。

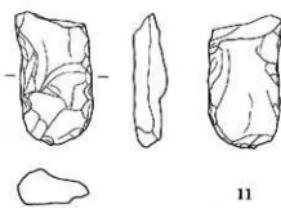
遺物は、深鉢（1～5）・器台形土器（6～8）・ミニチュア土器（9）・打製石斧（11～13・15～17）・磨製石斧（18）・横刃型石器（19）などが出土している。



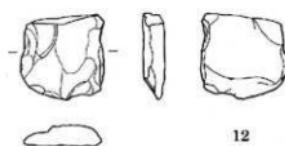
第4図 7号住居跡



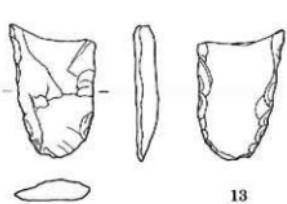
第5図 7号住居跡出土遺物 (1)



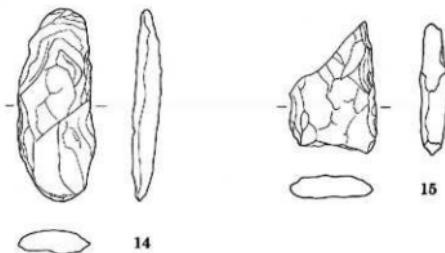
11



12

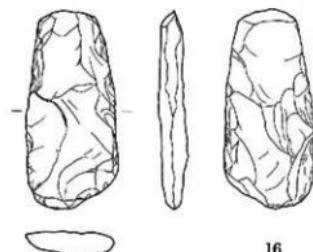


13

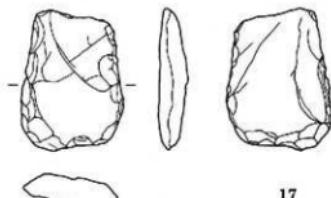


14

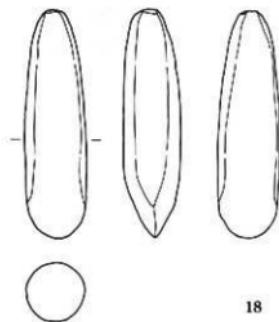
15



16



17



18



19



第6図 7号住居跡出土遺物(2)

土偶の脚部(10)は住居跡から北側のC-3グリッドで出たものであるが都合上ここに掲載した。

器台形土器6~8はP-2の東側で住居の北壁隅からまとめて出土した。7・8は床面上のほぼ同一レベルに並べて置かれたままとみられ、6は逆位で覆土中にやや浮いた状態であった。ミニチュア土器9はP-1内へ若干落ち込んでいた。磨製石斧はP-2の西側床面上から出土している。

本遺構の南東部には自然の谷状地形が存在し、遺物(1~3・14)はそこへ流れ落ち込むかのように分布するが、おそらく谷上に構築された床面が谷内へと長い年月で沈下したためと考えられる。

2. 古墳時代

本遺跡では第Ⅰ・Ⅱ次調査すでに計13軒の古墳時代後期の住居跡が発見されており、今回さらに後期の住居跡2軒が検出された。

a. 1号住居跡(第7・8図、図版3)

調査区の北東部に位置し、5号住居跡と重複して切られ、北西部には3号住居跡が隣接している。

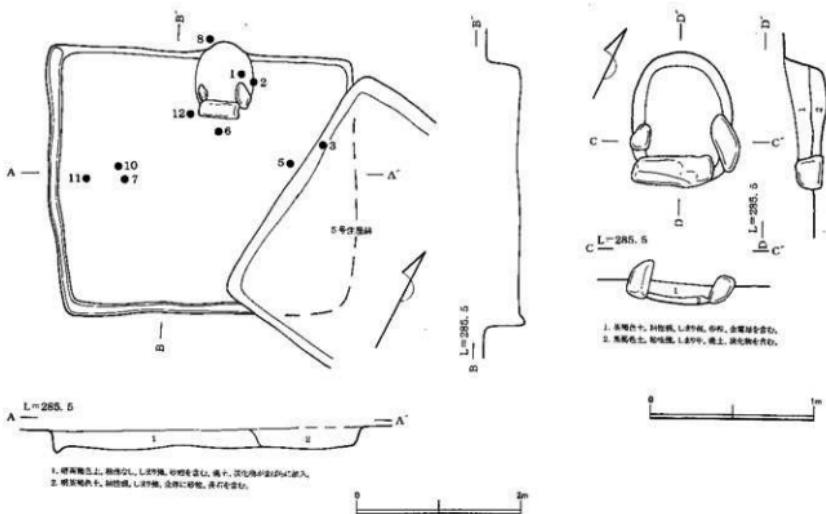
規模は、東西約3.7m、南北約3.2mの長方形を呈し、壁高は約20~40cmを測る。

壁はおよそ垂直に立ち上がり、床面はわずかに凹凸がみられる。また、西壁から南壁の際にかけて幅約15~20cm、深さ約8cmの壁溝が掘り込まれている。

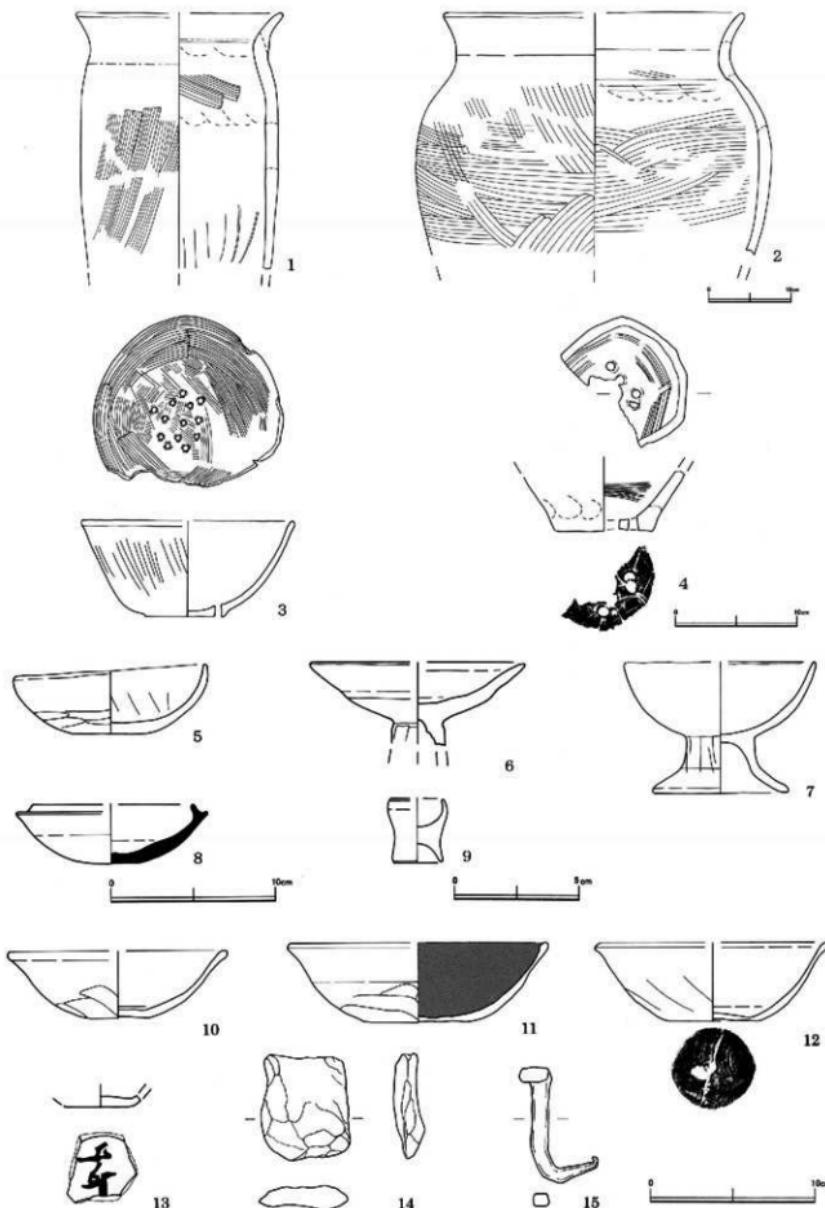
カマドは、住居跡北壁のほぼ中央に位置し、長軸約85cm、短軸約60cmで火床部の掘り込みはわずかにみられる。カマドはほとんど崩れていたが、元来炊口となる両袖部には長さ約25~30cmの大石を直立させ、天井石には長さ約50cm、幅約20cmの大型の石が組まれていたようである。

遺物は、甕(長頸甕1、球胴甕2)、壺3・4、壺5、高坏6・7、小型手捏土器9などがある。

甕1はカマド内、甕2はカマド東側覆土から出土し、壺3と壺5は住居跡東側床面に近いところから、高坏6は住居跡西側のやはり床面に近い位置からそれぞれ出土している。須恵器壺8は、カマド北東部のすぐ脇から出土している。



第7図 1号住居跡



第8図 1号住居跡出土遺物

なお、高坏 7 や坏 10~13 は覆土の最上層に分布し、本遺構の確認段階のものである。

b. 3号住居跡（第9図、図版4）

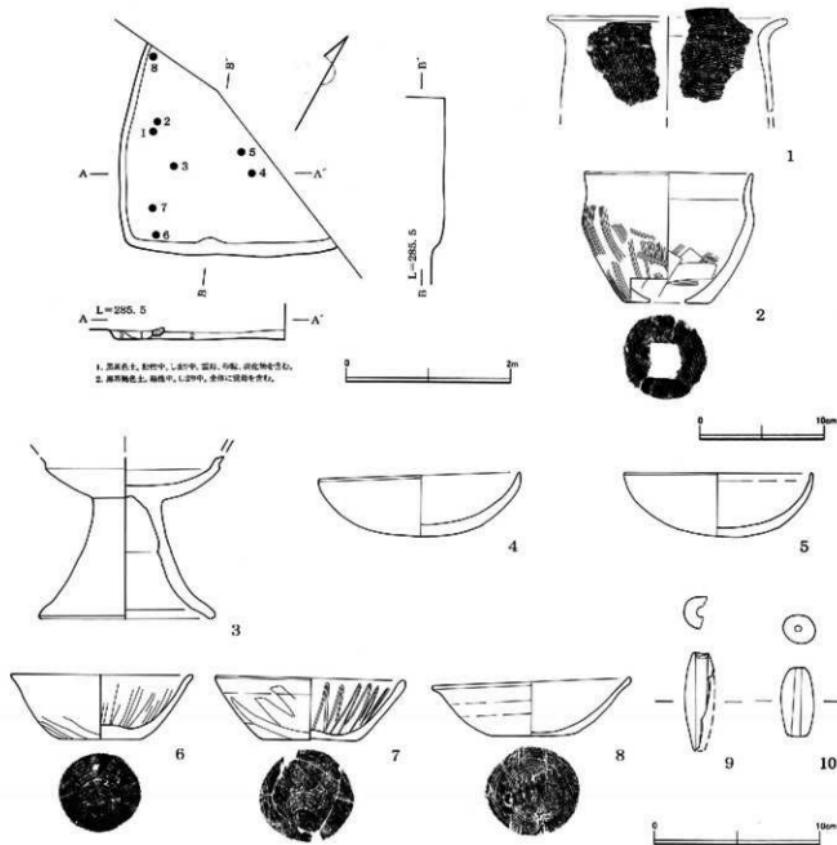
調査区の北部中央にあり、北東半部が調査区外となっている。周辺には1号住居跡や2・3号溝状遺構などが近接している。

確認可能な規模は東西約2.6m、南北約2.5mでおそらく方形を呈すると考えられる。深さは約10~15cmを測り、壁は緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ水平である。

本住居跡にはとくに付随する施設等は確認されていない。

遺物は甕1、瓶2、高坏3、坏4・5、土錘9・10などがある。また、6~8は平安時代の坏であるが、1号住居跡と同様に遺構確認段階に出土したものである。

甕1、瓶2は住居跡西側の覆土中から、高坏3は甕1、瓶2よりもやや高い位置から出土している。坏4・5は住居跡中央よりからまとまって出土し、4はほぼ床面上、5は覆土中から出ている。



第9図 3号住居跡と出土遺物

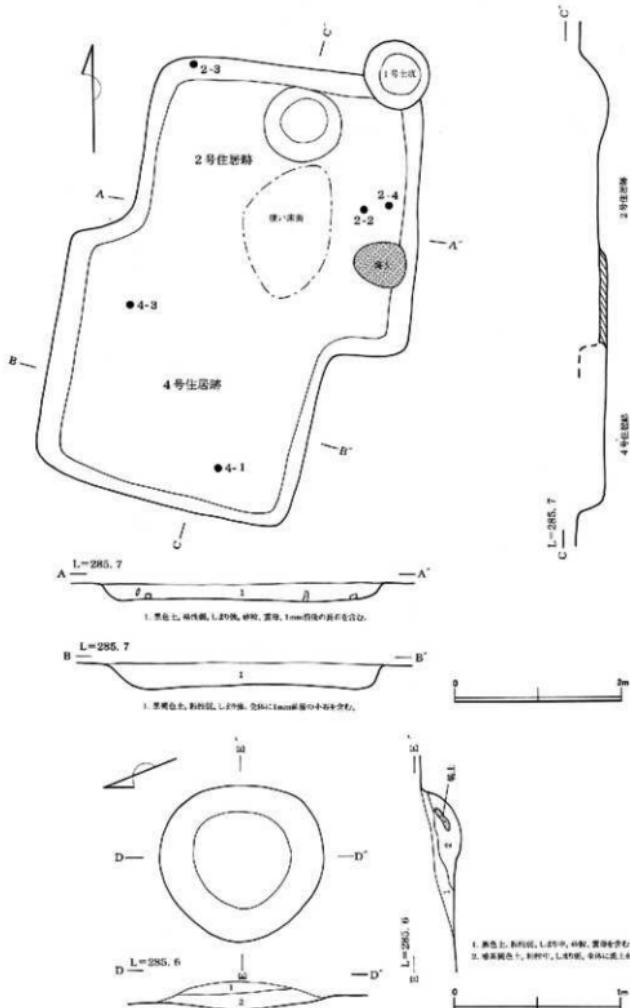
3. 平安時代

今回の調査で4軒の住居跡が発見された。

a. 2号住居跡 (第10・11図、図版5-1・2)

調査区南西部 A-2・B-2 に位置し、4号住居跡および1号土坑と重複関係にある。

規模は、東西約3.4m、南北約3.5mの方形を呈し深さ約25cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。床面は緩やかな凹凸があり、中央から南部にかけて硬く踏みしめられたような硬い面が広がる。



第10図 2・4号住居跡

北壁中央際には焼土を含んだ浅い土坑状の掘り込みがあり、また、東壁中央からやや南側にも焼土のまとまりがみられた。本来、住居跡のカマドが存在していたと思われるが判然としない。

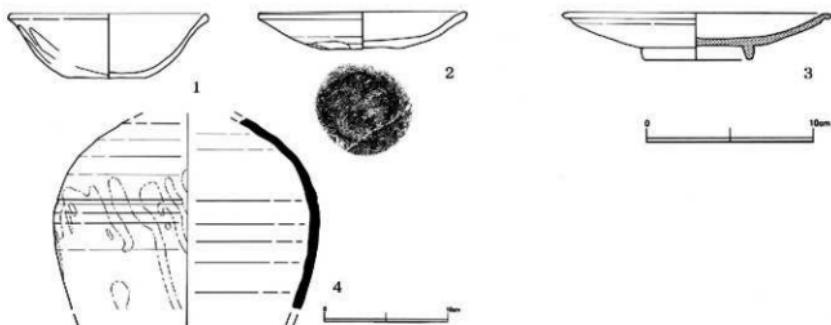
遺物は、壺1、皿2、灰釉陶器の皿3、灰釉陶器の壺4などが出土している。皿2と灰釉陶器の壺4は東部壁際の焼土が検出された北側ほぼ床面上にあり、そして灰釉皿3は北西部コーナー隅部の床面上から出土している。

b. 4号住居跡（第10・12図、図版5-1・3）

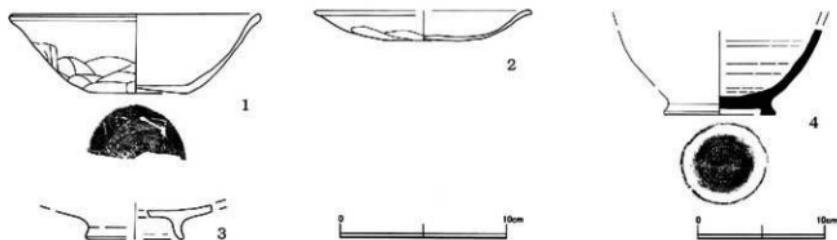
調査区南西部A-1・2に位置し、2号住居跡と重複し切られている。南東側に6号住居跡、1・2号溝状遺構が近接している。

規模は東西約3.3m、南北約3.1mで方形を呈し、深さ約30~35cmを測る。壁は全体的に緩やかに立ち上がる。本遺構はとくに施設等はみられなかった。

遺物は、壺1、皿2、黒色碗3、須恵器の壺4などが出土している。1は南東部から、3は北西部のそれぞれ床面に近い位置から出土している。



第11図 2号住居跡出土遺物



第12図 4号住居跡出土遺物

c. 5号住居跡（第13・14図、図版6）

調査区北東部D-3に位置し、1号住居跡の東側を切っている。

規模は東西約3.4m、南北約3.2mの方形を呈し、深さ35~50cmで壁は緩やかに立ち上がる。

住居跡の南には壁に平行するように東西に幅約90cm、深さ約15cmの落ち込みがみられ、さらに東側では幅約180cmと急激に幅広くなる。この遺構に伴う施設の一部であるのかどうかは不明である。

カマドは、明確にその形を残すものはないが東壁中央やや南から焼土と灰がまとまった箇所が認められ、おそらく本住居跡の東カマドであったと考えられる。

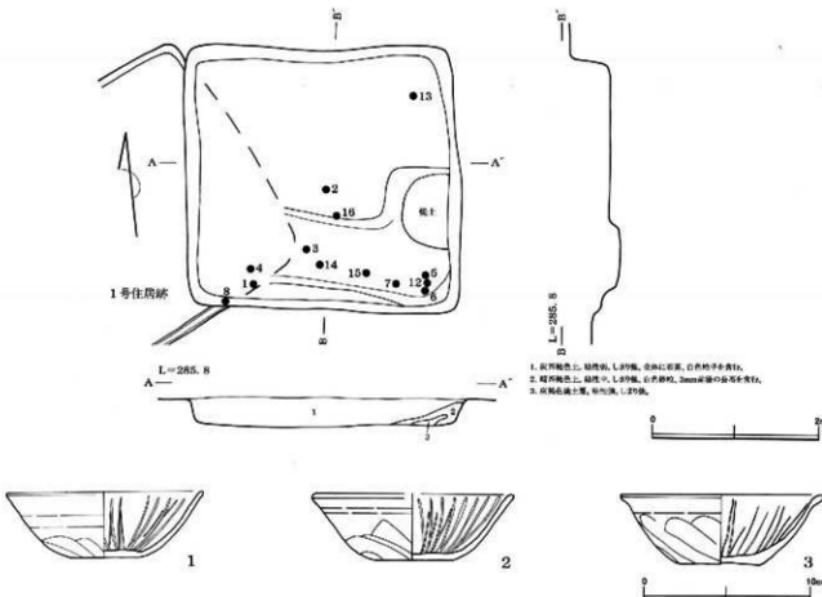
遺物は、壺1~11、皿12~15、須恵器の甕16、鉄製品17など遺物が豊富である。壺類は住居跡の南側に偏在しており、このうち壺1・2・4・8と墨書き器10、須恵器の甕16は遺構確認段階の最上層から、壺7は南東部の覆土中層からそれぞれ出土している。壺3は南側床面上、壺5・6は南東部覆土下層にあり皿12とまとまって出ている。

また、皿13は住居跡北東部、皿15は南東部のそれぞれ覆土中層に分布している。

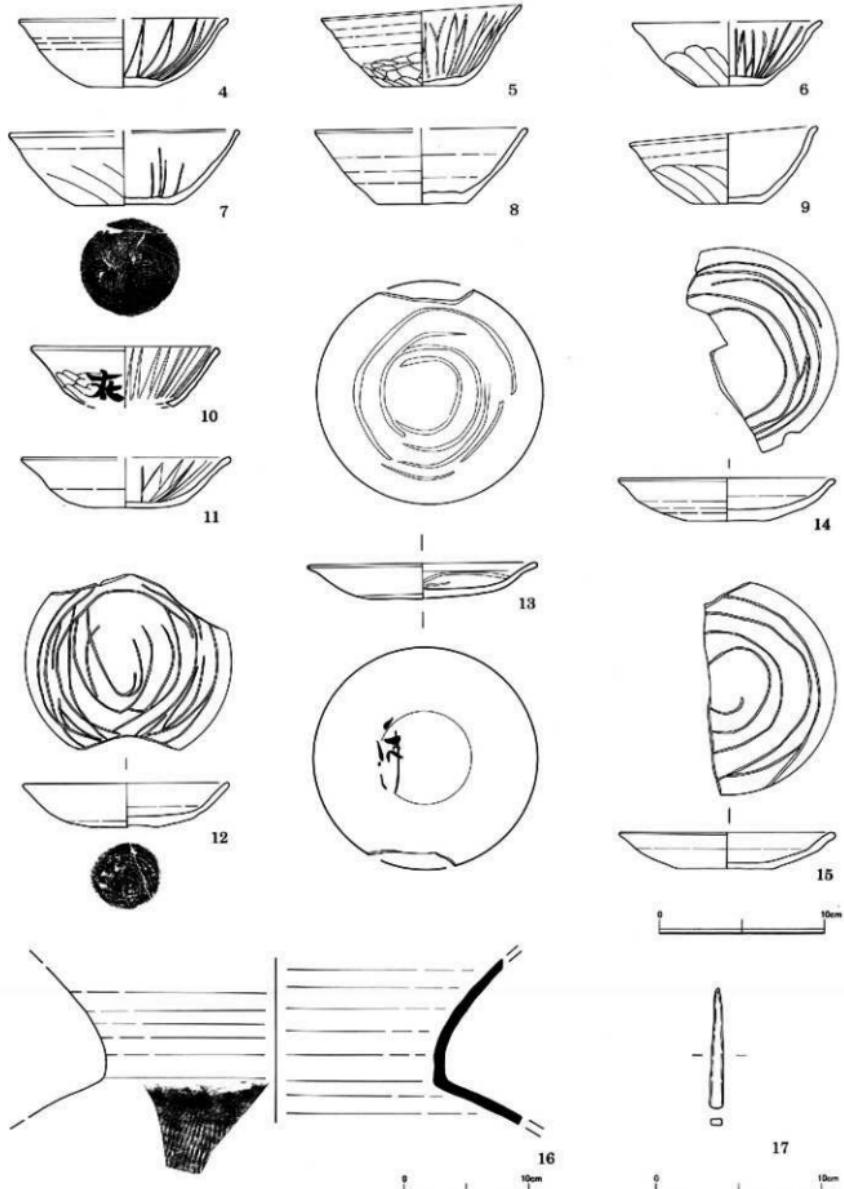
d. 6号住居跡（第15図、図版7-1~3）

調査区南西部A-1・B-1に位置し、西側を2号溝状遺構、住居跡中央を東西に1号溝状遺構が走り、本遺構はこれらの溝状遺構によって切られている。

住居跡南部は調査区外となっており、確認された規模は、東西約3.2m、南北約3.3mで南北に長軸をもつ長方形を呈している。深さは約40cmを測り、壁は緩やかに立ち上がっている。



第13図 5号住居跡と出土遺物 (1)



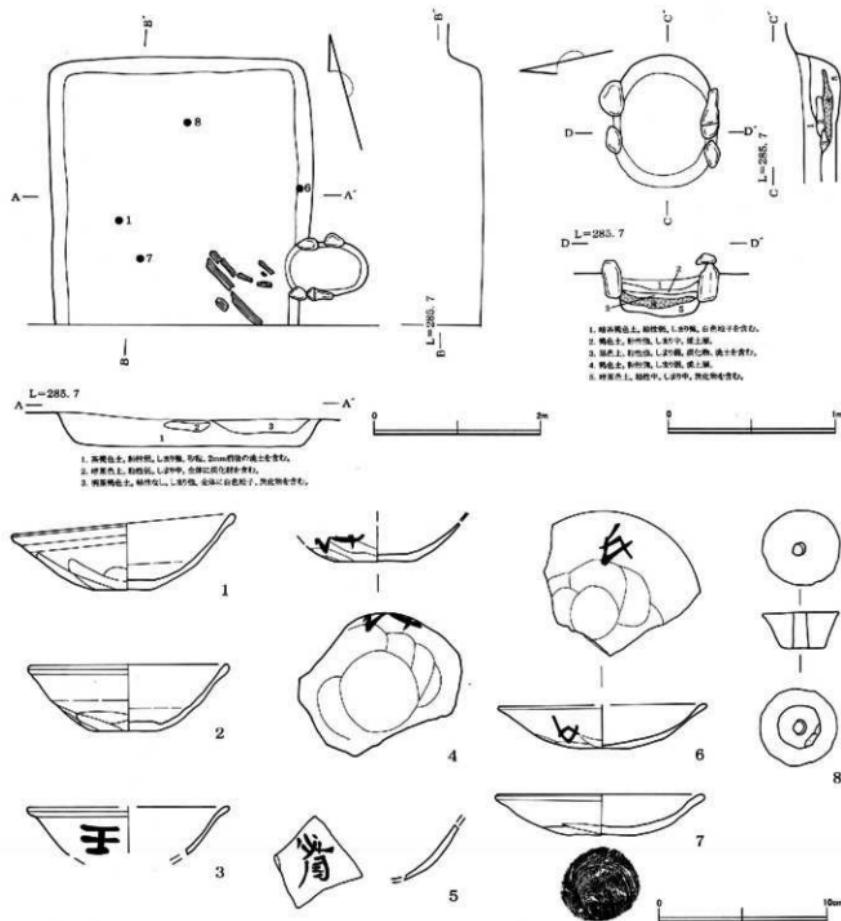
第14図 5号住居跡出土遺物(2)

東壁の南にはカマドが確認され、長軸約80cm、短軸約70cmを測る。そして、長さ約30cm弱の扁平な石を両袖に2個づつ直立させてカマドを構築している。なかには焼土および炭化物が充満していた。カマドの正面には、住居跡の柱材とおもわれる良好な炭化材が床面上から検出された。

遺物は、壺1~5、皿6・7、紡錘車8があり、このうち壺3~5、皿6は墨書き器で比較的多く出土している。

壺1と皿7は住居跡中央からやや西から出ているが、1は床面付近、7は覆土上層にある。

また、皿6はカマド北部の西壁に近い覆土上層から出ている。紡錘車8は住居跡北側の覆土中層から出土した。



第15図 6号住居跡S出土遺物

1号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値(cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			器高	口径	底径					
第8回1	土師器	長胴壺	—	(16.5)	—	長石、赤色粒子	暗茶褐色	良	口切削と縦形模ナデ。外腹側部斜位ハク目。内面底部下半斜位へラ型。	3-3
第8回2	土師器	丸胴壺	—	(24.0)	—	長石、石英、金雲母、赤色粒子	茶褐色	良	口切削から縦形模ナデ。外腹不規則な削りき。内面底部方向の器口と内底面。	3-3
第8回3	土師器	瓶	8.0	(17.3)	6.4	長石、石英	茶褐色	良	底部底径 6mm の円孔。外腹下斜位壁厚。外面底部一ラ型。内面底辺ハケ目。	3-3
第8回4	土師器	瓶	—	—	(8.0)	細、長石	淡茶色	良	底部底径 6mm の円孔。外腹下斜位壁厚。外面底部一ラ型。内面底辺ハケ目。	3-3
第8回5	土師器	壺	4.2	11.5	4.4	鐵窓	茶褐色	良	内面底部模位へラ型。外腹底部へ体部方向へ削り。外腹底部ハク目。	3-3
第8回6	土師器	高壺	—	(13.0)	—	鐵窓	暗茶色	良	内外面均部模位へラ型。外腹底部模位へ一ラ型。	3-3
第8回7	土師器	高壺	8.0	11.4	7.9	鐵窓	暗茶色	良	内外面均部模位へラ型。外腹底部模位へラ型。外腹底部模位へラ型。	3-3
第8回8	須恵器	壺	3.4	(9.8)	—	粗、小石、石英	外腹 淡白茶色 内面 底白色	良	ロコロ整形。	3-3
第8回9	土師器	ミニチュア土器	1.6	2.1	2.0	長石、金雲母	茶褐色	良	高壺。全体に模ナデ仕上げ。	3-3
第8回10	土師器	壺	4.9	15.7	5.6	細、赤色粒子	外腹 淡茶色 内面 黒色	良	ロコロ模ナデ。外腹底部と体部下半へ削り。底部凹軸を切り、ロコロ右回転。	3-3
第8回11	土師器	壺	4.1	13.0	3.9	鐵窓	外腹 暗茶色 内面 底白色	良	ロコロ模ナデ。外腹底部と体部下半へ削り。ロコロ右回転。	3-3
第8回12	土師器	壺	4.8	13.6	5.6	鐵窓	褐褐色	良好	ロコロ模ナデ。外腹底部模位へラ型。底部凹軸を切り、ロコロ右回転。	3-3
第8回13	土師器	壺	—	—	4.0	赤色粒子、金雲母	茶褐色	良好	底部点切り後、ヘラ型。底部裏面。	3-3

No.	器種	器形	計測値(cm)			石質	備考	図版
			最大長	最大幅	最大厚			
第8回14	石器	打製石斧	6.5	5.4	1.7	砂岩		
No.	器種	器形	計測値(cm)			備考	図版	
第8回15	鉄製品	鉄製品	7.1	1.0	0.8			

2号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値(cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			器高	口径	底径					
第11回1	土師器	壺	3.9	12.05	4.8	細、赤色粒子	茶褐色	良好	ロコロ模ナデ。外腹底部下半斜位へラ型。	5-2
第11回2	土師器	壺	2.3	12.4	4.5	鐵窓、赤色粒、石英	暗茶褐色	良好	外腹底部外腹模位へラ型。底部糞さり。	5-2
第11回3	灰陶器	高台付壺	3.0	15.6	6.6	鐵窓、底質	深灰色	良好	内面に絶縁色の自然色。	5-2
第11回4	灰陶器	壺	15.6	—	—	鐵窓	深灰色	良好	底部外腹に自然色。	5-2

3号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値(cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			器高	口径	底径					
第9回1	土師器	壺	—	(19.0)	—	金雲母、石英、長石	暗茶褐色	良	外腹底部模位ハク目。内面底部模位ハク目。	4-2
第9回2	土師器	瓶	10.7	13.5	6.5	長石、金雲母	暗茶褐色	良好	底部底径 2.8cm の円孔。外腹模位ハク目。内面ハク後、ヘラ調整。外腹底部ハク目。	4-2
第9回3	土師器	高壺	(10.0)	—	10.3	砂粒	黑茶色	良	外腹底部模位ナデ。柄部外腹上面面取り、下部模位ハク目。柄部内面輪郭み取。	4-2
第9回4	土師器	壺	4.0	12.2	2.0	鐵窓、赤色粒子少。金雲母	暗茶色	良好	外腹底部下半斜位へラ型。内面底部模位磨き。	4-2
第9回5	土師器	壺	3.9	11.5	1.5	鐵窓、赤色粒子	外腹 黑褐色 内面 明褐色	良好	内面底部模位磨き。	4-2
第9回6	土師器	壺	4.0	11.0	5.0	鐵窓、砂粒・赤色粒子少	茶褐色	良好	外腹底部下半斜位へラ型。内面底部模位磨き吹き、コロコロ回転。	4-2
第9回7	土師器	壺	3.8	11.3	5.9	鐵窓、長石、石英、赤色粒子	暗茶褐色	良	内面底部放水吹き。外腹底部下半斜位へラ型。底部糞さり後へラ調整。	4-2
第9回8	土師器	壺	3.6	12.0	5.4	鐵窓、長石、石英、赤色粒子	茶褐色	良	外腹底部に使。底部糞さり。	4-2
No.	器種	器形	計測値(cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			長軸	短軸						
第9回9	土製品	土罐	6.05	1.85	—	鐵窓	褐茶褐色	良好	中央部最大幅。底面肥厚。底径 6.6mm の円孔。	4-2
第9回10	土製品	土罐	4.2	1.95	—	鐵窓、砂粒、石英	茶褐色	良好	中央部最大幅。先端面部取り。底径 4 mm の円孔。	4-2

第1表 住居跡出土遺物観察表(1)

4号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値(cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			器高	口径	底径					
第12回1	土師器	壺	4.9	14.9	5.6	緻密、赤色粒子	外面 暗茶色 内面 黒色	良好	内黒土器。体部下半へ削り。底部外側へア葉形。朱印。	5-3
第12回2	土師器	壺	1.8	12.6	4.6	緻密、赤色粒子	外面 暗褐色 内面 暗茶色	良好	口縁部擴ナダ。外底部斜傾へ削り。ロクロ右記印。	5-3
第12回3	土師器	壺	—	—	(5.7)	緻密。赤色粒子	外面 暗茶色 内面 黒色	良好	内黒土器。内表面横状暗文。高台部擴ナダ。	5-3
第12回4	須恵器	壺	(6.8)	—	8.6	緻密、長石。硬質	外面 暗灰色 内面 明灰茶色	良好	底部粘付高台。ロクロ右記印。高台部へア葉形。外底部捺部剣(麻印)。	5-3

5号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値(cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版	
			器高	口径	底径						
第13回1	土師器	壺	4.0	11.6	4.2	緻密。赤色粒子	茶褐色	良	ロ辺部擴ナダ。内底部斜傾放射状暗文。外底部剣と体部下半へ削り。ロクロ右記印。	6-2	
第13回2	土師器	壺	4.1	11.8	4.7	緻密。赤色粒子、長石	外面 明褐色 内面 暗茶色	良	内底部削下半斜位へ削り。内底部擴ナダ。外底部墨痕。内表面放射状暗文。	6-2	
第13回3	土師器	壺	4.3	12.1	5.0	砂粒、石英、赤色粒子	淡茶褐色	良好	内底部削下半斜位へ削り。内底部群放射状暗文。	6-2	
第14回4	土師器	壺	4.3	12.6	4.35	緻密。赤色粒子	赤褐色	良好	外面部削下半斜位へ削り。ロ辺部擴ナダ。内底部斜傾放射状暗文。	6-2	
第14回5	土師器	壺	4.9	12.0	4.4	緻密。長石、赤色粒子	橙褐色	良好	内底部削下半斜位へ削り。内底部斜傾放射状暗文。底盤ア葉形。	6-2	
第14回6	土師器	壺	3.9	11.0	4.2	緻密。長石、赤色粒子	明褐色	良	外底部擴ナダ。内底部斜傾放射状暗文。外底部削下ア葉形。ロ辺部削ア葉。	6-2	
第14回7	土師器	壺	4.5	13.5	6.0	緻密。赤色粒子	明茶褐色	良	ロ辺部擴ナダ。外底部削下半斜位へ削り。内底部斜傾放射状暗文。底盤ア葉形。ロクロ右記印。	6-2	
第14回8	土師器	壺	4.6	12.6	5.4	緻密。赤色粒子	橙褐色	良	ロ辺部擴ナダ。	6-2	
第14回9	土師器	壺	4.8	13.1	5.6	緻密。赤色粒子	橙褐色	良好	ロ辺部擴ナダ。外底部削下半斜位へ削り。内底部斜傾放射状暗文。底盤ア葉形。	6-2	
第14回10	土師器	壺	(3.8)	11.4	(5.6)	長石、赤色粒子。	明茶色	良好	ロ辺部擴ナダ。底盤ア葉形削下半斜位へ削り。底盤火切。	6-2	
第14回11	土師器	壺	3.1	(12.6)	5.0	緻密。赤色粒子、雲母	明茶色	良好	外底部口辺部擴ナダ。内底部放射状暗文。底盤ア葉形。	6-2	
第14回12	土製品	皿	2.7	12.2	4.0	緻密。赤色粒子	赤褐色	良好	内底部放射状暗文。外面下へ削り。	6-2	
第14回13	土師器	皿	2.1	13.5	4.0	長石。金雲母	明茶色	良好	内底部放射状暗文。底盤ア葉形。外底部墨痕。	6-2	
第14回14	土師器	皿	2.6	(13.6)	5.0	緻密。赤色粒子	赤褐色	良好	内底部放射状暗文。内外面接続。	6-2	
第14回15	土師器	皿	2.2	13.0	6.0	緻密。赤色粒子、金雲母	橙褐色	良好	ロ辺部擴ナダ。内底部削下半斜位へ削り。内底部火切。	6-2	
第14回16	須恵器	大甕	(13.5)	—	—	緻密	灰茶色	良好	外底部自然釉。	6-2	
No.	器種	器形	計測値(cm)			備考					図版
			最大長	最大幅	最大厚						
第14回17	鉄製品		7.3	0.8	0.4	一部欠損					

6号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値(cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			器高	口径	底径					
第15回1	土師器	壺	4.6	13.4	3.5	緻密。赤色粒子、長石	橙褐色	良好	外底部削下半斜位へ削り。底部ヘア葉形。	7-3
第15回2	土師器	壺	4.05	11.8	4.0	緻密。赤色粒子、長石、雲母	茶褐色	良好	外底部削下半斜位へ削り。底部ヘア葉形。	7-3
第15回3	土師器	壺	—	(12.0)	—	緻密。長石	茶褐色	良好	ロ辺部擴ナダ。内底部墨痕。	7-3
第15回4	土師器	壺	—	—	4.8	長石。金雲母、赤色粒子	明茶色	良好	外底部削下半斜位へ削り。底盤削除。外底部火切。	7-3
第15回5	土師器	壺	—	—	—	長石	茶色	良好	外底部へ削り。外底部墨痕。	7-3
第15回6	土師器	皿	2.6	(12.8)	3.2	緻密。長石、赤色粒子、金雲母	茶色	良好	底盤へ底部へ削り。ロ辺部ロクロナダ。外底部墨痕。	7-3
第15回7	土師器	皿	2.6	12.6	4.2	緻密。長石、石英、赤色粒子	茶褐色	良好	外底部削下半斜位へ削り。底盤火切。	7-3
No.	器種	器形	計測値(cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			長径	短径	厚さ					
第15回8	土製品	纺錘車	4.6	2.1	2.2	緻密	茶褐色	良好	最大径9mmの円孔。丁寧なヘア巻き。	7-3

第2表 住居跡出土遺物観察表(2)

7号住居跡出土遺物

No.	部 位	文様・調整	胎 土	色 調	焼成	図版
第5図1	口縁部	U縫部内側、刻みの施された施錠。空間に割みと沈線による文様。	粗、白色粒子、長石、石英、黒雲母	赤褐色	良	2-4
第5図2	口縁部	U縫部内側、刻みの施された施錠。空間に割みと沈線による文様。	粗、白色粒子、長石、石英、黒雲母	赤褐色	良	2-4
第5図3	崩落～底部	父瓦割みによる4段度の継ぎ施錠。	粗、白色粒子、石英、金、黒雲母	赤褐色	良	2-4
第5図4	崩落	地文RJ織文。	粗、白色粒子、石英、金、黒雲母	赤褐色	良	2-4
第5図5	崩落	地文RJ織文。	粗、白色粒子、石英、金、黒雲母	赤褐色	良	2-4
第5図6	底部	大型座錠の底鉄。破壊割れ跡は研磨。	粗、白色粒子、金雲母、赤色粒子	黒褐色	良好	2-4
第5図7	底部	大型座錠の底鉄。破壊割れ跡は研磨。	粗、白色粒子、長石、黒雲母	赤褐色	良	2-4
第5図8	底部	大型座錠の底鉄。破壊割れ跡は研磨。地文RJ織文。	粗、白色粒子、長石、金、黒雲母	赤褐色	良	2-4
第5図9	口縁～底部	ニサユア土器。口縁部に直径約4mmの円孔を斜めに穿孔。	粗、白色粒子、金、黒雲母	黒褐色	良	2-4
第5図10	土偶(脚部)	無文。	やや粗、長石、石英	黒褐色	良	2-4

No.	器 種	計測値 (cm)	石質	備 考	図版	
		最大長 最大幅 最大厚				
第6図11	打製石斧	(8.1)	4.4	2.1	砂 岩	2-4
第6図12	打製石斧	(5.3)	5.1	1.3	粘板岩	2-4
第6図13	打製石斧	(8.0)	5.0	1.4	砂 岩	2-4
第6図14	打製石斧	(11.7)	4.7	1.6	粘板岩	2-4
第6図15	打製石斧	(8.0)	5.3	1.7	粘板岩	2-4
第6図16	打製石斧	12.2	5.6	1.6	砂 岩	2-4
第6図17	打製石斧	(8.7)	6.2	1.7	砂 岩	2-4
第6図18	磨製石斧	13.9	3.8	3.5	緑色軽灰岩	2-4
第6図19	スクレーバー	4.2	8.6	1.0	砂 岩	2-4

第3表 住居跡出土遺物観察表(3)

4. 時期不明

a. 土坑(第16図、図版7-4・5)

計2基が発見された。

No.	位 置	規 模 (m)			形態	備 考	図版
		長軸	短軸	深さ			
1号	B-2	0.83	0.80	0.10	円形		7-4
2号	B-2	0.97	(0.86)	0.18	椭円形		7-5

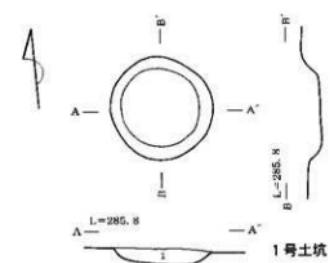
第4表 土坑一覧

b. 溝状造構(第16図、図版8-1・2)

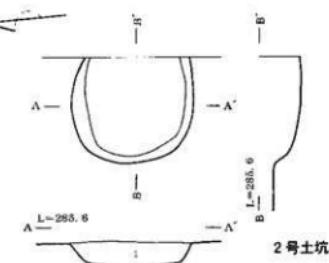
計3条が確認された。

No.	位 置	規 模 (m)			備 考	図版
		最大長	幅	深さ		
1号	A-1・B-1～4	12.0	0.3～0.5	0.22	複数からフイゴの羽口片出土。	
2号	A-B-1	14.8	0.45～0.75	0.50		8-1
3号	C-2・3	6.0	0.3～0.78	0.60	坪が出土。	8-2

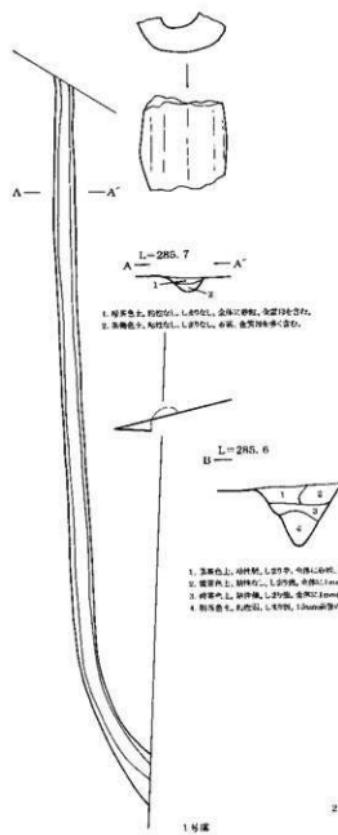
第5表 溝状造構一覧



1. 黄褐色土、砂質なし。しづか層、砂層、貝の壳を含む。



1. 灰褐色土上、砂層なし。しづか層、砂層、貝の壳を含む。



1. 深褐色土、砂質なし。しづか層なし。全体に砂層、全層に貝殻を含む。
2. 黄褐色土、砂質なし。しづか層なし。6层、貝質層多く含む。

1. 深褐色土上、砂質なし。しづか層なし。全層に砂層、1mm程度の貝殻の小石を含む。
2. 黄褐色土上、砂質なし。しづか層なし。全層に1mm程度の貝殻の小石を含む。
3. 深褐色土上、砂質なし。しづか層なし。全層に1mm程度の貝殻の小石を含む。
4. 黄褐色土上、砂質なし。しづか層なし。1mm程度の貝殻の小石を含む。

第16図 1・2号土坑と1~3号溝状遺構



1. 灰褐色土上、砂層なし。しづか層、砂層、貝の壳を含む。

0 1m

第3章 遺構外出土遺物

遺構外からは縄文、古墳、平安、中世の各時代の遺物が出土しており、その概要をみていきたい。

縄文時代 (第17図) 1~11は中期中葉で藤内~井戸尻式に相当する。12は後期の土器で、調査区内から1点だけ出土している。加曾利B式の口縁部であろう。

古墳時代 (第18図 13~25) 13~15は甕で、13は長胴甕、14は球胴甕にあたり、15は底部のみであるが14と同様のものとみられる。16は壺であろうか、口縁部が大きく立ち上がっている。17~19は壺で、口縁部がそのまま直線的やや外傾しながら内湾するもの17と緩やかに内湾する18・19などがある。20~22は高杯、23~25は底部に複数の孔が穿たれた甕である。

平安時代 (第19・20図 26~54) 26・27は甕、28~42は土器器環で内37~41は墨書きである。40には「鳴西」と書かれた文字がみえる。43~51は皿類で49に満巻きの暗文、50・51には墨書きの文字がみられる。52~54は末葉の雲母を多く含んだ小皿である。

須恵器・陶磁器類 (第20・21図 55~68) 55・56は甕の口縁部、57は須恵器蓋、58は高杯、59は壺蓋、60は壺、61は長頸壺、62・63は甕胴部片、64は壺で、65は小形の平瓶とみられる。

66・67は縄釉陶器で66は碗、67は耳皿で、後者は二重高台を有し輪状文がある。

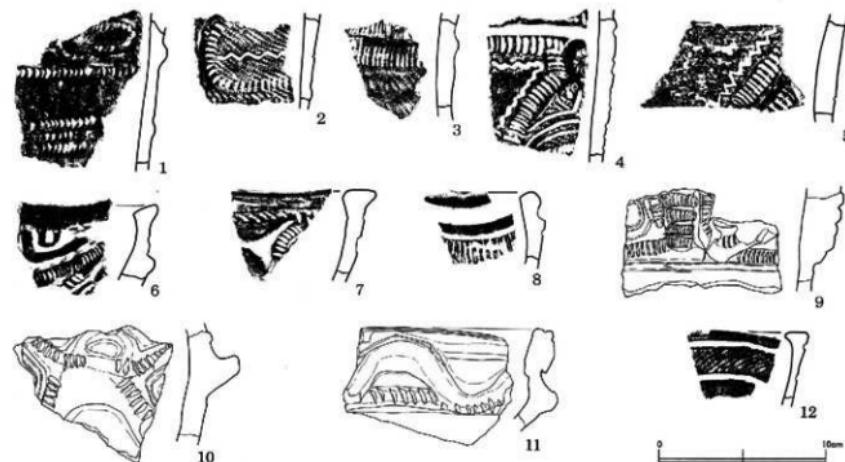
68は幅広の「蛇ノ目高台」を有する中国産の白磁底部の破片である。

中世 (第21図 69~73) 69は青磁碗の口縁部で鎬連弁文が観察され、このほか口縁部などを含む破片13点がある (カラー図版)。70は古瀬戸後期(15世紀中頃)の卸目付大皿、71・72は天目茶碗で古瀬戸後期(14世紀後半)のものである。73は内耳土器の内耳部の破片にあたる。

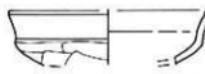
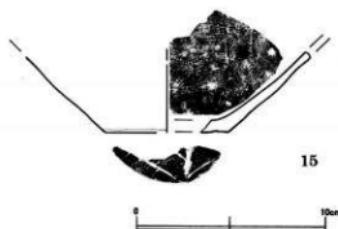
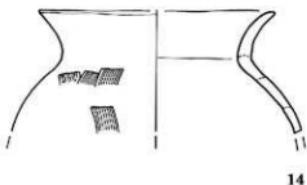
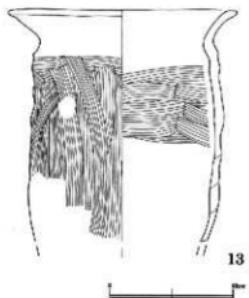
土製品 (第21図 74~76) 74は土玉、75は土錘で、76は紡錘車であろう。

石器 (第21図 77~82) 77~79は黒曜石製の石鏃、80は凹石、81は打製石斧、82は磨製石斧の基部が欠損したものである。

その他 欠損した刀子片1点や大小の鉄滓があり、またこのほかフイゴの羽口先端が溶融し、破損した破片なども数点出土している。



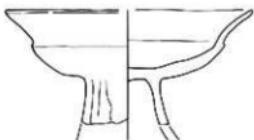
第17図 遺構外出土遺物 (1)



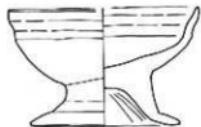
17

18

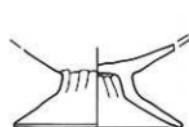
19



20



21



22



23



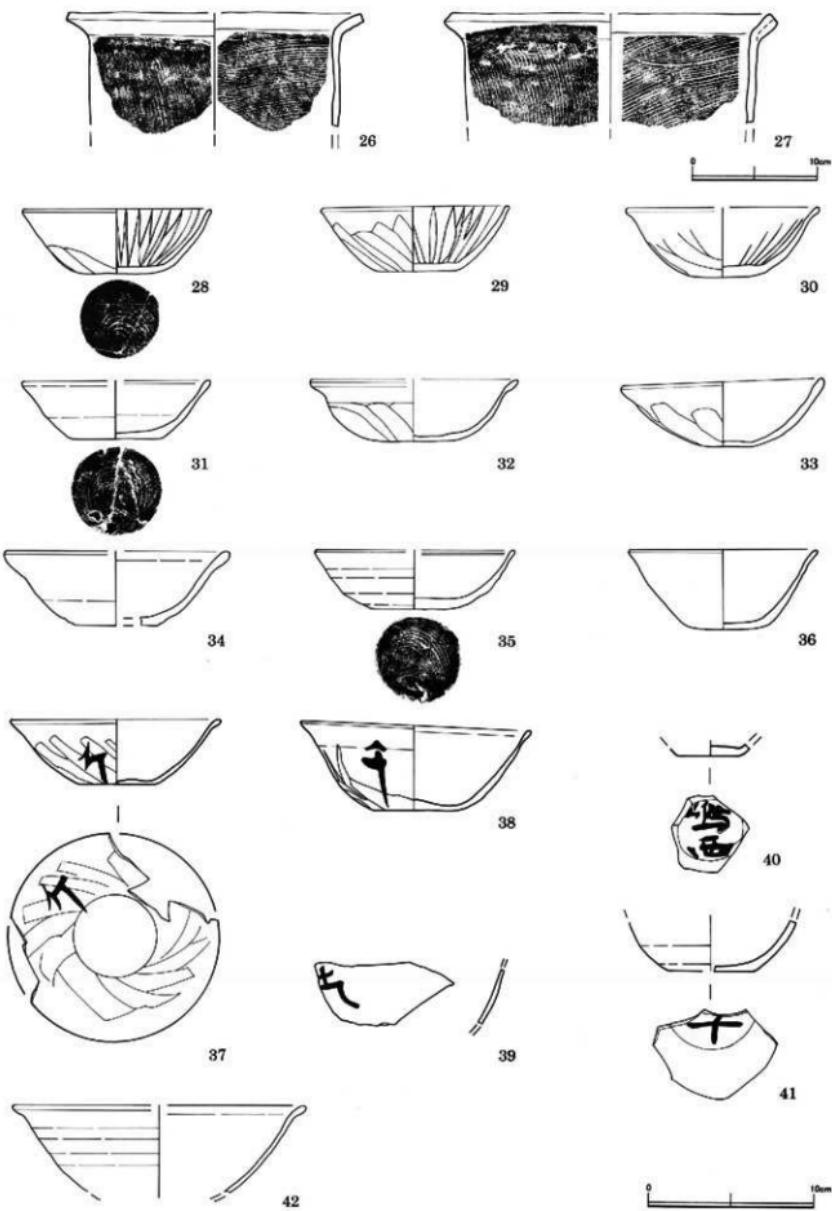
24



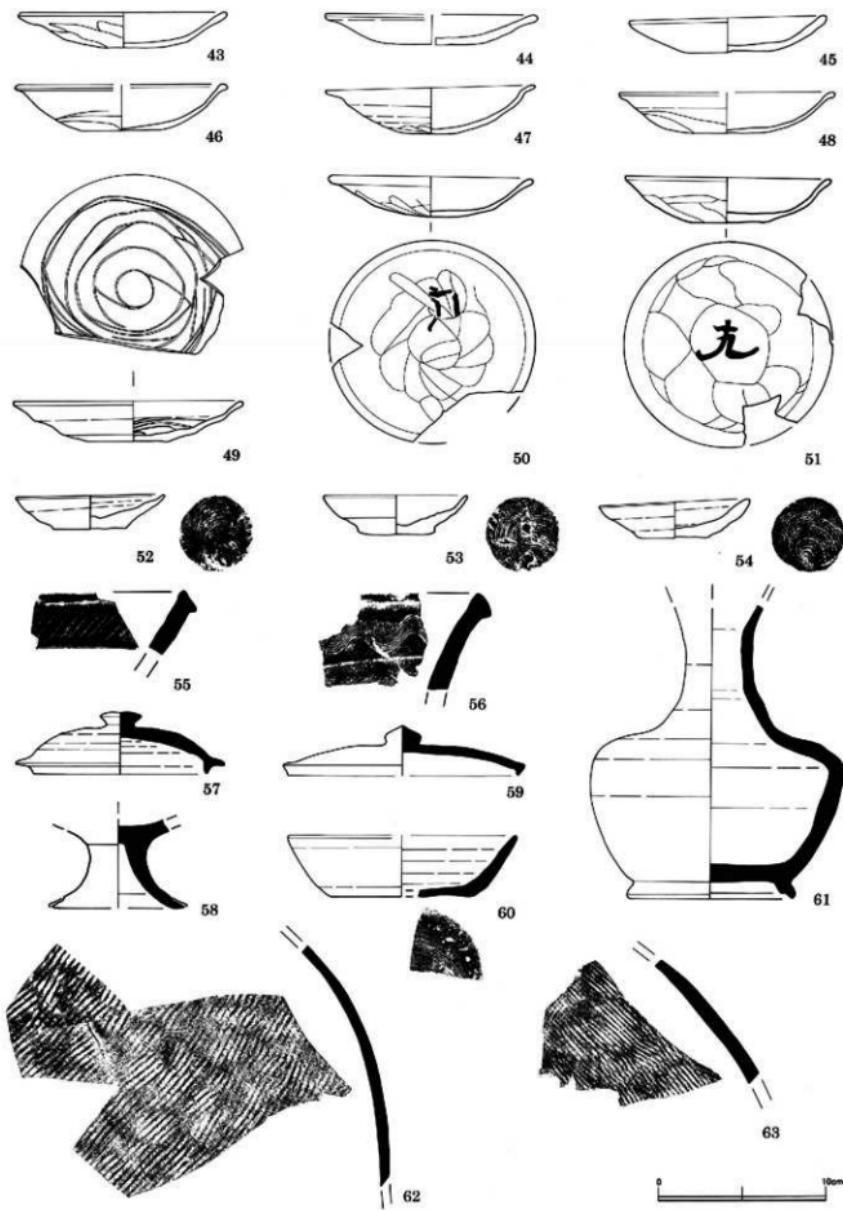
25



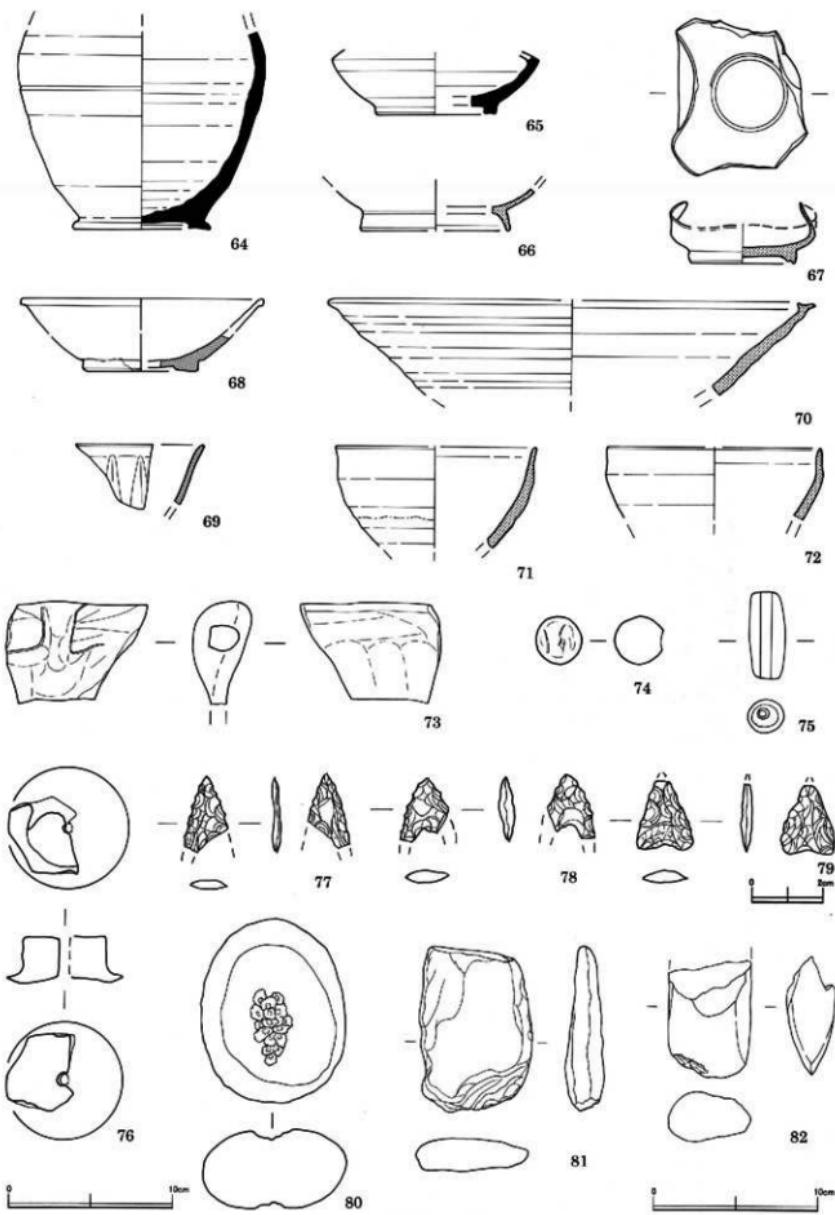
第18図 遺構外出土遺物(2)



第19回 遺構外出土遺物 (3)



第21図 遺構外出土遺物(5)



第21図 造構外出土遺物 (5)

No	出土地区	種別	部位	文様・調整・特徴	胎土	色調	焼成	図版	
第17回1	D-2	埴輪	頭部	複円や蝶形の隆起があり、尾端部は三角形文を主。	やや白、白色粒子、石英、黒雲母	にじむ・黒褐色	良	S-3	
第17回2	C-2	埴輪	頭部	陶文丸窓文。側面の弧状の溝があり、頭に耳押文を充填。	やや白、白色粒子、金雲母	にじむ・黒褐色	良	S-3	
第17回3	D-2	埴輪	頭部	陶文丸窓文。側面の弧状の溝があり、頭に耳押文を充填。	やや白、白色粒子、石英、黒雲母	にじむ・黒褐色	良好	S-3	
第17回4	D-2	埴輪	頭部	陶文丸窓文。側面に複円文の区画線。内部に滑状仕上げ。	やや白、白色粒子、石英、黒雲母	にじむ・黒褐色	良	S-3	
第17回5	C-2	埴輪	頭部	側面隆起部に複円文の角形文。頭に耳押文。	やや白、白色粒子、石英、黒雲母	にじむ・黒褐色	良	S-3	
第17回6	D-2	埴輪	頭部	側面隆起部に複円文の角形文。頭に耳押文。	やや白、白色粒子、石英、黒雲母	にじむ・黒褐色	良	S-3	
第17回7	D-2	埴輪	口唇部	口唇部にS字型の凹凸の頭部。三叉文と角押文。	やや白、白色粒子、長石、黒雲母	にじむ・黒褐色	良好	S-3	
第17回8	C-2	埴輪	口唇部	口唇部にS字型の凹凸の頭部。三叉文と角押文。	やや白、白色粒子、長石、黒雲母	にじむ・黒褐色	良	S-3	
第17回9	B-2	埴輪	口唇部付近	地文丸窓文。頭部のあわせ頭・複円窓。一部半身彫り。	やや白、白色粒子、長石、石英、黒雲母	にじむ・黒褐色	良	S-3	
第17回10	D-2	埴輪	口唇部付近	地文丸窓文。頭部のあわせ頭・複円窓。一部半身彫り。	やや白、白色粒子、長石、石英、黒雲母	にじむ・黒褐色	良	S-3	
第17回11	D-2	埴輪	口唇部	複円窓。口唇部削除。頭からある複円窓部上に複状窓。	やや白、白色粒子、長石、金雲母	にじむ・黒褐色	良	S-3	
第17回12	B-2	埴輪	口唇部	2条の複円窓部内に地文丸窓文。	やや白、赤色粒子、長石	にじむ・黒褐色	良好	S-3	
No	出土地区	種別	基形	計測値(cm) 高さ 口径 底径	胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
第18回13	B-4	土師器	長颈瓶	19.2 18.4 --	やや白、赤色粒子、石英	茶褐色	良	内外面凹口部横径ナメテ、外面部横断面・横位ハケ目。 内部底部横位ハケ目。	S-3
第18回14	D-2	土師器	丸頸瓶	-- (19.0)	-- 長石、石英	灰褐色	良	口切部横ナメ、外面部横位ハケ目。内部底部横位ハケ目。	S-3
第18回15	D-2	土師器	丸頸瓶	-- (10.0)	織目	淡茶色	良	外面ハケ後。わざわざにへら削き。内部平底剛刷	S-3
第18回16	H-4	土師器	坪	6.0 10.9 --	長石	淡茶色	良	口切部横ナメ。木底無。	S-3
第18回17	D-3	土師器	坪	-- (12.0)	織目	外周 灰茶色 内面 黑褐色	良	口切部横ナメ。	S-3
第18回18	C-3	土師器	坪	3.7 12.0 --	織目、赤色粒子、長石	暗茶色	良好	口切部横ナメ、内面ハラ削き。外部口切一部削除。	S-3
第18回19	C-3	土師器	坪	3.7 12.2 --	織目、赤色粒子、長石	暗茶色	良好	口切部横ナメ。外面部下部削除ヘラ削り。外底部底部アフリ。	S-3
第18回20	A-1	土師器	高坪	(7.0) (15.0)	織目	淡茶色 (=灰茶色)	良好	口切部横ナメ。外面部下部削除ヘラ削り。外底部底部アフリ。	S-3
第18回21	C-3	土師器	高坪	7.3 (11.4) (9.2)	織目、赤色粒子	淡茶色 (=灰茶色)	良好	口切部横ナメ。外面部ヘア。	S-3
第18回22	B-4	土師器	高坪	9.1 -- (9.0)	織目	淡茶色	良好	複数横ナメ。内面裏台頭位ヘア。	S-3
第18回23	H-4	土師器	瓶	--	織目、赤色粒子	淡茶色	良好	外底部円孔。(内2箇所は半穴)。	S-3
第18回24	H-4	土師器	瓶	--	織目、赤色粒子、長石、黑雲母	淡茶色	良好	1箇所の円孔。(内2箇所は半穴)。	S-3
第18回25	H-4	土師器	瓶	--	織目、赤色粒子	淡茶色	良好	1箇所のみ生存。	S-3
第19回26	D-3	土師器	便	-- (23.3)	金雲母	暗茶褐色	良	口切部横ナメ、内面横位ハケ目。外面部横位ハケ目。	S-3
第19回27	D-3	土師器	便	-- (25.5)	金雲母、長石	暗茶褐色	良	口切部横ナメ、外面部横位ハケ目。	S-3
第19回28	C-3	土師器	坪	4.0 11.3 3.6	織目、赤色粒子、長石	淡茶色	良好	口切部横ナメ。外底部下半斜位ヘラ削り。内底斜削状態。底部糸切アフリ。	S-3
第19回29	C-3	土師器	坪	4.0 11.4 4.8	織目、赤色粒子、長石	淡茶色	良好	口切部横ナメ。内底斜削状態。底部糸切アフリ。ヘラ削り。スス付着。	S-3
第19回30	C-2	土師器	坪	4.3 (11.5) 3.5	織目、赤色粒子	明褐色	良好	口切部横ナメ。外底部下半斜位ヘラ削り。内底斜削状態。底部糸切アフリ。ヘラ削り。スス付着。	S-3
第19回31	C-3	土師器	坪	3.6 11.1 5.2	織目	明褐色	良	口切部横ナメ。外底斜片アフリ。	S-3
第19回32	A-1	土師器	坪	3.7 12.4 4.3	織目、赤色粒子、長石	淡茶色	良好	口切部横ナメ。外底部下半斜位ヘラ削り。底部糸切アフリ。ヘラ削り。	S-3
第19回33	C-2	土師器	坪	4.3 11.9 3.6	織目、赤色粒子	淡茶色	良	口切部横ナメ。外底部下半斜位ヘラ削り。底部糸切アフリ。スス付着。	S-3
第19回34	B-4	土師器	坪	4.75 (13.5) (6.0)	織目、赤色粒子	淡茶色	良好	口切部横ナメ。底部糸切アフリ。スス付着。	S-3
第19回35	A-1	土師器	坪	3.6 (11.8) 5.2	織目、赤色粒子、長石、金雲母	明褐色	良好	口切部から底部下半斜位ヘラ削り。	S-3
第19回36	B-4	土師器	坪	4.9 (12.4) 4.8	長石	明茶色	良好	口切部横ナメ。	S-3
第19回37	A-1	土師器	坪	4.1 12.4 5.6	長石	明茶色	良好	底部糸切アフリ。ヘラ削り。底部糸切アフリ。ヘラ削り。	9
第19回38	B-4	土師器	坪	4.9 13.6 5.6	金雲母	淡茶色	良好	外底部斜位ヘラ削り。	9
第19回39	B-4	土師器	坪	--	小石 (内墨)	淡茶色 (内墨)	良好	外底部斜位状態。	9
第19回40	C-2	土師器	坪	--	4.0 織目	暗茶褐色	良好	外底部斜位ヘラ削り。	9
第19回41	C-3	土師器	坪	--	(8.3) 織目	外周 白茶色 内面 黑色	良好	外底部斜位状態。底部糸切アフリ。ヘラ削り。	9
第19回42	B-4	土師器	坪	(5.4) (17.8)	織目、赤色粒子	淡茶色	良好	口切部横ナメ。底部糸切アフリ。ヘラ削り。	9
第20回43	C-1	土師器	皿	2.2 12.3 3.7	織目、赤色粒子、長石	淡茶色	良好	口切部横ナメ。外底部斜位ヘラ削り。底部糸切アフリ。	S-3
第20回44	C-2	土師器	皿	1.8 (12.6) 6.2	織目、赤色粒子、長石、金雲母	明褐色	良好	口切部横ナメ。底部糸切アフリ。	S-3
第20回45	B-4	土師器	皿	2.2 12.0 4.9	織目	明茶色	良	口切部横ナメ。底部糸切アフリ。	S-3
第20回46	C-5	土師器	皿	2.8 12.0 4.8	織目	淡茶色	良好	口切部横ナメ。外底部斜位ヘラ削り。	S-3
第20回47	B-4	土師器	皿	2.0 12.8 3.0	織目	淡茶色	良好	口切部横ナメ。底部糸切アフリ。底部ヘア削り。	S-3
第20回48	I号位	土師器	皿	2.5 12.4 4.5	長石	淡茶色	良好	口切部横ナメ。外底部へア削り。ロクロ右前部。	9
第20回49	D-3	土師器	皿	2.5 (13.6) 4.9	織 赤色粒子	淡茶色	良好	口切部横ナメ。内部糞便状堆文。外部凹部ヘア削り。底部糞便ヘア削り。	S-3

第6表 遺構外出土遺物観察表(1)

第20区54	B-4	土師器	皿	2.4	12.4	3.0	赤色粒子、黄石	明黄色	良好	底面へ体部外筋付側へ2割り、黒斑。 口辺部横ナギ、外筋体部下半と底筋側へ2割 底筋系切痕。	8-3, 9		
第20区55	B-4	土師器	皿	2.8	12.5	4.4	赤色粒子、黄石	半褐色	良好	口辺部横ナギ、底筋系切痕。	8-3, 9		
第20区56	B-2	土師器	小皿	2.1	8.8	4.4	金雲母	茶褐色	良	口辺部横ナギ、底筋系切痕。	8-3		
第20区57	B-2	土師器	小皿	2.3	8.6	4.6	金雲母	浅褐色	良好	口辺部横ナギ、底筋系切痕。	8-3		
第20区58	B-2	土師器	小皿	2.2	8.9	4.0	金雲母	茶褐色	良好	口辺部横ナギ、底筋系切痕。	8-3		
第20区59	B-2	土師器	小皿	2.2	8.9	4.0	金雲母	茶褐色	良好	口辺部横ナギ、底筋系切痕。	8-3		
第20区60	B-2	土師器	皿	—	—	—	—	淡灰色	良好	外面に打鉄磨代工具の削除剥離。	9		
第20区61	—	須恵器	甕	—	—	—	—	深灰色	良好	外面に口辺部横擦痕状。	9		
第20区62	—	須恵器	甕	—	—	—	—	外筋	良好	外面に口辺部横擦痕状。	9		
第20区63	B-1	須恵器	甕	3.8	(12.7)	—	—	深灰色、赤色、硬質	灰白色	良	ロクロ右回転。	9	
第20区64	B-1	須恵器	甕	5.3	(7.6)	—	—	褐色	灰白色	良好	ロクロ左回転。	9	
第20区65	C-2	須恵器	甕	(3.5)	(11.6)	—	—	深灰色、黄石、金雲母	外筋	明褐色	良好	ロクロ左回転。	9
第20区66	A-1	須恵器	甕	4.75	13.8	8.7	褐、黄石	底面灰黑色	良好	口辺部横ナギ、底筋系切痕。	9		
第20区67	C-1	須恵器	長颈甕	17.8	—	9.8	褐、白色粒子、石英、小石	暗褐色	良好	体部下半部側へ2割り。	9		
第20区68	—	須恵器	甕	—	—	—	—	外筋	灰褐色	良好	外筋平行切口目。	9	
第20区69	B-1	須恵器	甕	—	—	—	—	内面	暗褐色	良好	内面横側ハケ目。	9	
第20区70	B-4	須恵器	甕	—	—	—	—	外筋	良好	外筋平行切口目、内面ナガヒヘラ。	9		
第20区71	B-4	須恵器	甕	(12.1)	—	8.0	褐、黄石	底面灰黑色	良好	内面底部および外面自然釉。	9		
第21区65	—	須恵器	小型の平盤	—	—	(7.3)	鐵色	外筋	茶褐色	良好	内面底部および外面自然釉。	9	
第21区66	—	陶器	縦縫瓶	—	—	(9.0)	鐵色	鐵色	良好	高台横側ナギ、外面縫合部へ2割き。	9		
第21区67	B-4	陶器	縦縫瓶	—	—	(6.5)	6.6	鐵色	良好	折戸式	9		
第21区68	—	陶器	白磁瓶	—	—	(6.8)	鐵色	良好	白磁	良好	その他の高台、生産年代9~10世紀代。	9	
第21区69	—	陶器	青磁瓶	—	—	(13.3)	鐵色	青磁	良好	外面横側縫合部。	9		
第21区70	—	陶器	剪口目大甕	—	(29.6)	—	鐵色	剪口目	良好	内面底部折戸、古唐戸後IV期古。	9		
第21区71	—	陶器	天目茶碗	(6.0)	(10.4)	—	鐵色	天目	良好	古唐戸後I期。	9		
第21区72	—	陶器	天目茶碗	(4.4)	(13.0)	—	鐵色	天目	良好	古唐戸後II期。	9		
第21区73	B-1	陶器	内耳大甕	—	—	—	鐵色	良	外面スミ。内側互角點付。	9			

第7表 遺構外出土遺物観察表(2)

ま と め

松ノ尾遺跡はこれまでの第Ⅰ・Ⅱ次調査で弥生時代末頃～古墳時代初頭の住居跡1軒、古墳時代後期住居跡計13軒、堅穴状遺構1基、奈良時代住居跡計3軒、平安時代住居跡計24軒、堅穴状遺構計6基が発見されており、とくに古墳時代後期から平安時代にかけての大きな集落跡であることが近年明らかとなってきた。

今回の第Ⅲ次調査は、わずか約250mの調査範囲であったが縄文、古墳、平安時代の住居跡計7軒、土坑2基、溝状遺構3条と土器をはじめとする多くの遺物が出土し貴重な成果を得た。

縄文時代 中期中葉の住居跡が1軒確認され、本遺跡内では今回該期の遺構としてはじめての発見となつた。

古墳時代 住居跡2軒が発見され、いずれも遺物から7世紀前半に相当するものとみられる。

本調査に限らずこれまで町内で行われてきた大小の試掘調査の結果を含めてみても、荒川と貢川に挟まれた町南部の扇状地形のなかで、該期の遺構・遺物が多く確認できるのは、今のところほど「松ノ尾遺跡」に限られる。第Ⅱ次調査では7世紀の住居跡が3軒のほか、奈良時代の住居跡3軒が発見されており、今後さらに本遺跡内の該期の遺構数は増加していくことが予測される。

甲府盆地北西部地域の古墳時代後期（とくに6世紀後半～7世紀前半）は敷島町南部の周囲に古墳ならびに群集墳が相次いで築造されるようになる（第1図参照）が、しだいに有力豪族によるそれまでの古墳造営は終焉を迎、7世紀後半になると本遺跡から北西へ約2kmの通称敷島台地の西側斜面に天狗沢瓦窯が操業

を開始するようになり、古代寺院建立へと力が注ぎ込まれるようになっていくことから、本地域においてはこのころ大きな画期を迎えることとなる。

今回発見された住居跡は周辺の地理的環境や古墳の分布状況等から古墳造営（とくに赤坂台）に何らかのかたちで携わった人々の集落の一部であった可能性が考えられる。今後、盆地北西部地域における該期の様相を解明していく上でも本遺跡の更なる調査成果が大いに期待される。

平安時代 4軒の住居跡が確認された。このうち、5号住居跡は出土した遺物の内容から9世紀後半に位置付けられ、残りの3軒2・3・6号住居跡は10世紀前半ころに相当する。先の古墳時代と同様に本遺跡には該期の遺構が広範囲に分布することが明らかとなってきた。

遺構外からは縁釉陶器の碗、皿など破片5点のほか、今回縁釉の耳皿(67)が出土している（カラー図版）。この耳皿は残念ながら遺構には伴っていないが、形態等から10世紀前半頃（折戸53窓式）のものとみられ（註1）、時期的には今回発見された集落ともほぼ併行している。

また、遺構外からであるが白磁(68)が出土した。これは「蛇ノ目高台」と呼ばれる疊付きで幅広の低い高台をもつ特徴があるので、いわゆる「初期貿易陶磁」に属するものである。

初期貿易陶磁器は、日本の遺跡では8世紀末葉～10世紀前半頃にみられるよう、代表的なものには越州窯青磁、唐様式の白磁、長沙窯の黄釉陶器などが上げられる。これまで全国的に北は秋田県から南は鹿児島県までの遺跡で発見されているようであるが、「博多、大宰府、平安京を除くと、遺跡ごとの出土量は一片ないし数片にすぎず、その遺跡の性格も官衙や寺院などに限定されている」（今井2000）ともいわれている。なお、白磁(68)は中国郊窯産とみられる（註2）。

その他 遺構外から陶磁器類が出ている。貿易陶磁器では青白磁・青磁計13片（カラー図版）が出土しており、これらは12世紀後半～13世紀代に相当し、青白磁1片、劃花文7片と鏡蓮弁文5片などがある。

国產陶器類は、灰釉平碗片1点、卸目付大皿片1点、天目茶碗片2点、内耳土器片7点などがあり、これらはおよそ古瀬戸後期段階に相当するもので14～15世紀代の資料である（註3）。

以上のように、今回の調査では本遺跡の過去の成果からもとくに古墳時代、平安時代については遺構密度の高い状況が遺跡内の広い範囲に及んでいることを裏付ける結果であったといえよう。

また、明確な遺構等は確認されなかつたが中世の陶磁器類の資料も出土しており、周辺には該期に関する何らかの遺構ないし生活面が存在すると思われる。

（註1）文化庁美術工芸課主任文化財調査官 斎藤孝正氏の御教示による。

（註2）京都市埋蔵文化財研究所 百瀬正臣氏の御教示による。

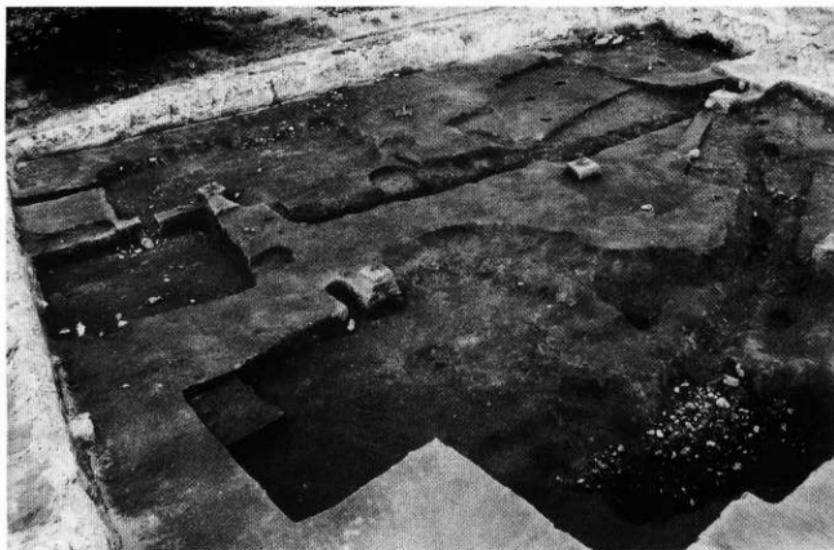
現在県内では類例はみられないが、同様な白磁が近県の長野県において確認できる。

（註3）瀬戸市埋蔵文化財センター 藤澤良祐氏の御教示による。

引用・参考文献

- 今井 敦 2000『日本の美術7』No.409 文化庁／東京国立博物館／京都国立博物館／奈良国立博物館
齊藤孝正 2000『日本の美術6』No.410 文化庁／東京国立博物館／京都国立博物館／奈良国立博物館
敷島町編纂委員会 1966『敷島町誌』敷島町役場
敷島町教育委員会 1992『天狗沢瓦窯跡と古代甲斐國』第2回敷島歴史フォーラム
敷島町教育委員会 2001『埋蔵文化財試掘調査年報 01』敷島町文化財調査報告第10集
敷島町教育委員会 2002『埋蔵文化財試掘調査年報 02』敷島町文化財調査報告第11集
十賀駿武 1988『竜王町の遺跡－竜王町遺跡詳細分布調査報告』山梨県中巨摩郡竜王町教育委員会
森原明廣 1991『金の尾遺跡－第2次発掘調査報告書』敷島町教育委員会
萩原孝一・木山 真 1997『芦羽遺跡』山梨県教育委員会
高野玄明 1995『櫻田遺跡』山梨県教育委員会
石神孝子 1996『唐松遺跡』山梨県教育委員会
伊藤正幸 2001『米草遺跡』甲府市教育委員会
伊藤正彦・山崎雅恵 2001『久保之沢遺跡』甲府市教育委員会
山梨県史編纂委員会 1998『山梨県史』山梨県

図版



1. 調査区全景



2. 発掘風景 1



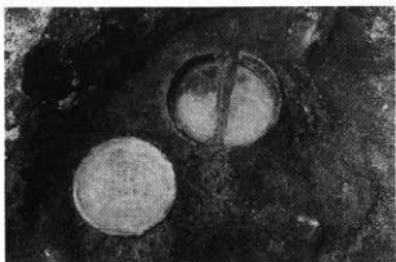
3. 発掘風景 2



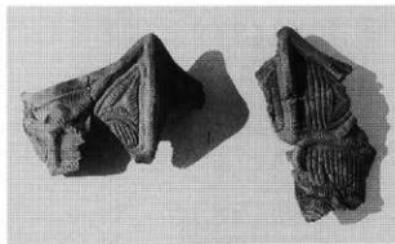
1. 7号住居跡



2. 遺物出土状態 1



3. 遺物出土状態 2



7住-2

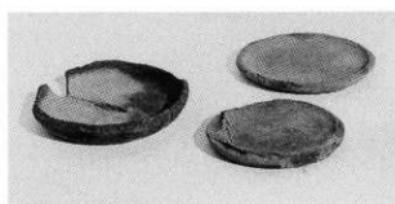


7住-3

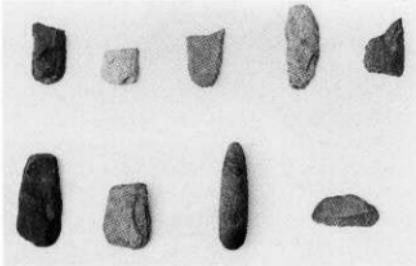


7住-9

7住-10



7住-6～8



7住-11～19

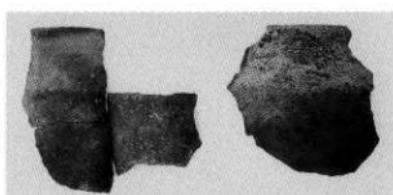
4. 7号住居跡出土遺物



1. 1号住居跡



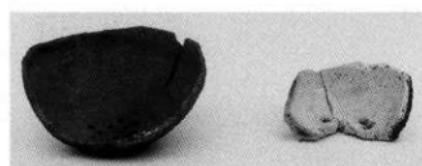
2. 1号住居跡カマド



1住-1



1住-2

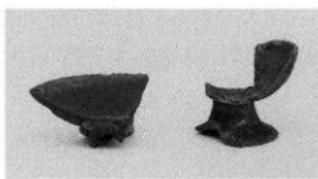


1住-3

1住-4



1住-5



1住-6

1住-7



1住-8



1住-9



1住-10

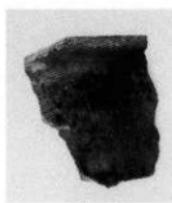
1住-11

1住-12

3. 1号住居跡出土遺物



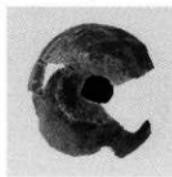
1. 3号住居跡



3住-1



|



3住-2



3住-3



3住-4

3住-5



3住-6

3住-7

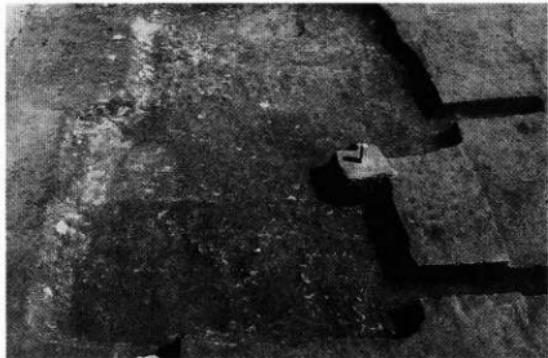
3住-8



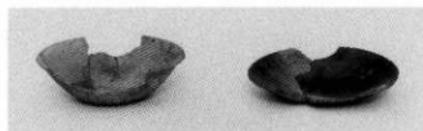
3住-9

3住-10

2. 3号住居跡出土遺物



1. 2·4号住居跡



2住-1

2住-2

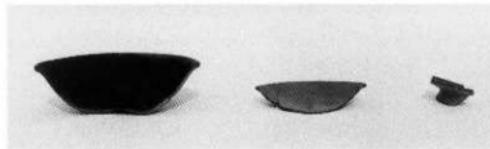


2住-3



2住-4

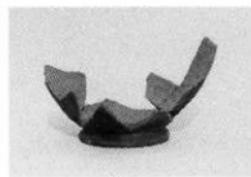
2. 2号住居跡出土遺物



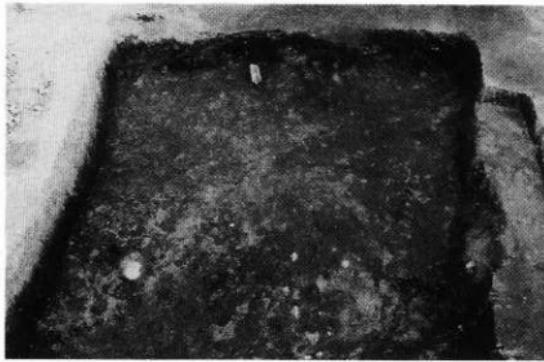
4住-1

4住-2

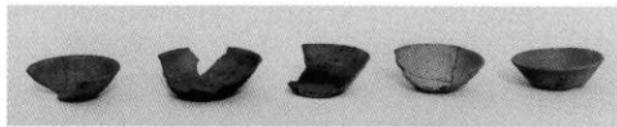
4住-3



3. 4号住居跡出土遺物



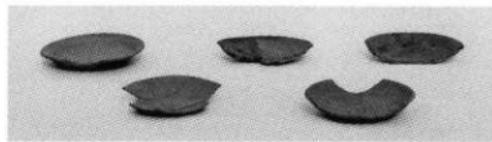
1. 5号住居跡



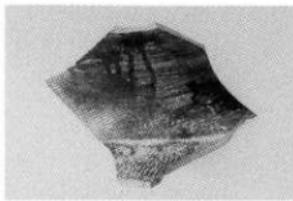
5住-1 5住-2 5住-3 5住-4 5住-5



5住-6 5住-7 5住-8 5住-9 5住-10



5住-13 5住-14 5住-15
5住-11 5住-12



5住-16



5住-10墨書

2. 5号住居跡出土遺物



1. 6号住居跡

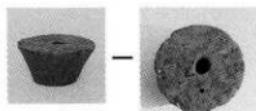


2. 6号住居跡カマド



6住-1

6住-2



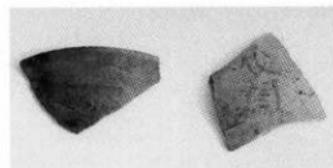
6住-8



6住-4

6住-6

6住-7



6住-3墨書

6住-5墨書



6住-4墨書



6住-6墨書

3. 6号住居跡出土遺物



4. 1号土坑



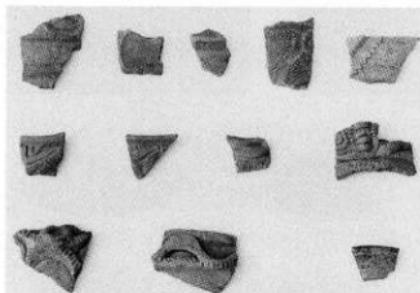
5. 2号土坑



1. 2号溝状遺構



2. 3号溝状遺構



遺外-1~12



遺外-13



遺外-14・15



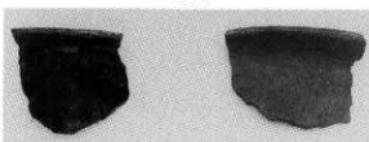
遺外-16~19



遺外-20~22



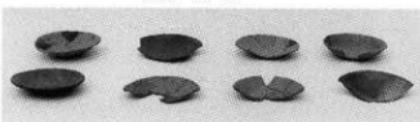
遺外-23~25



遺外-26・27



遺外-28~36



遺外-43~47・49~51



遺外-52~54

3. 遺構外出土遺物 (1)



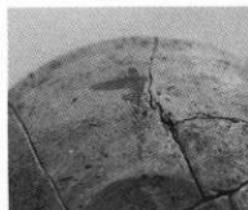
遺外-37



遺外-40



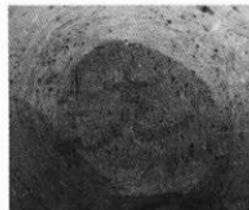
遺外-50



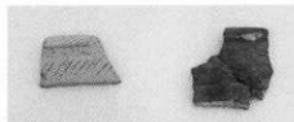
遺外-38



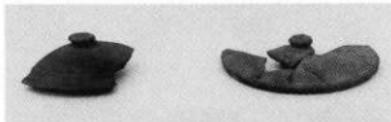
遺外-41



遺外-51



遺外-55・56



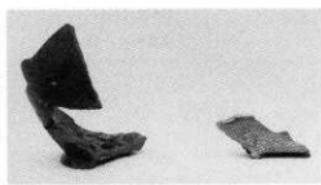
遺外-57・59



遺外-58



遺外-61



遺外-64・65



遺外-66・67



遺外-70～72



遺外-77～82



遺外-74～76

遺構外出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	まつのおいせき							
書名	松ノ尾遺跡Ⅲ次							
副書名								
巻次								
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書							
シリーズ番号	18							
編著者名	大嵐正之・小坂隆司							
編集機関	敷島町教育委員会							
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020							
発行年月日	平成16年4月20日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
まつのおいせき 松ノ尾遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町大下条 122-1外	193928	18			平成10年 3月13日～ 平成10年 5月11日	250	マンション 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松ノ尾遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 平安時代	住居跡 土坑 清状遺構	縄文土器 土師器 須恵器 磁器 石器	縄文住居跡から深鉢形土器底部を再利用した皿状の土器3点と有孔のミニチュア土器出土。 また、縄胎陶器の耳皿、初期貿易陶磁器である白磁1類が出土。			

敷島町文化財調査報告 第18集

松ノ尾遺跡Ⅲ

発行日 2004年(H16)4月20日

発行 敷島町教育委員会

山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020

TEL(055)277-4111

印刷 南協和印刷社

